

塩見孝也論叢★6

1974・4

一向過渡期世界論の防衛と発展のために(1)序論

目 次

- 第一章 「過渡期世界論」を防衛し、反赤軍派キャンペーを撃滅しよう！ 2
- 第二章 諸「過渡期世界論」批判と連合ブント「12・18路線」について 3
- 第三章 「反スタ」にかこつけてマルクス主義経済学を修正する榎原君の経済学を批判する 5
- 第四章 小ブル傲慢主義・空論主義の反スタ・トロツキズムからの「過渡期世界論批判」を反批判す 15
- 第五章 八木同志等清算主義のメンシェビキの黒い「臨総パンフ」を批判す 33

第一章 『過渡期世界論』を防衛し、反赤軍派

キャンペーンを撃滅しよう。

「一向過渡期世界論」の継承、防衛、発展は、同盟の再建、統一に於て焦眉の理論的課題です。又この課題は別の側面に於て、理論、綱領面の方面での銃撃戦と、清として帰結點をみた、連赤敗北の総括の役割も果たすことになります。

何故ならば、同盟赤軍派が一連の「一向過渡期世界論」を立脚点にして、これを導きの糸としてこれまで斗ってきたこと、いわば同盟赤軍派の綱領上の立場・方法・観点を「一向過渡期世界論」（今后、「過渡期世界論」という用語を使用するときは、断りがない限り、「一向過渡期世界論」を意味すると了解しておいてください。）が一定程度表現してきたからに他なりません。それ故にこそ、同盟の再建・統一に際して、この「過渡期世界論」の正しい総括＝継承・防衛・発展の立場・方法・観点が要求されるのは当然のことです。

ところで「過渡期世界論」が同盟にとってどのような要衝的位置を占めているが故にこそ、日米両帝国主義・資本家階級の人民内部の日和見主義的・修正主義的分子が我々のこれまでの斗いに対し、実践面で攻撃をかけてくるにとどまらず、これに満足せず、内側から理論面に於てこの「過渡期世界論」にアレコレの、同様の誹謗・中傷を必死で集中的に投げかけ、同盟の解体を促進せんと血道をあげたのはけだし当然な事です。

そしてこの反赤軍派キャンペーンに影響されて、同盟内にも極く一部の「過渡期世界論」を清算する清算主義の日和見主義的・修正主義的傾向が発生してきたこともまた当然なわけです。

右翼日和見主義の清算主義は、赤軍派の実践上の斗いを清算すると同時に、その行為のやましさから解放され自己正当化するための良心の拠り所を求めるためにこの反赤軍派キャンペーンに援護を求めて、「過渡期世界論」を清算し赤軍派のこれまでの全ての実践、全ての理論を一切合財洗い流して、同盟赤軍派を同盟赤軍派とは似つかぬメンシェヴィキ的なサークルに、変質・再編せんとしているわけです。

この反動的陰謀の中心に「パンフ164」への誹謗中傷の攻撃を据えていくのです。

又、このような右翼日和見主義の清算主義とは性質が違うのだが、つまりこれまでの赤軍派の斗いを正しいと肯定し、理論、路線面も基本的には肯定、止揚せんとしつつも、「過渡期世界論」の本質的な意義について未熟な理解しかもたず、又小ブル反スターリン主義のトロツキズムに対して正して立場を確けず、動搖し、「過渡期世界論」—164の防衛に確信を持ち切れず、小ブル反スターリン主義の批判に武装解除している一人か二人位の人もいます。

これは中心的傾向ではないにせよ、やはり一種の理論上の清算主義であることを我々は見究めておくべきです。いずれ

にせよこのような清算主義の諸傾向は、プロ人民や同盟を攪乱させる役割を担つたとしてもなんら実践的能力や創造力をもつていず、せいぜい反赤軍派キャンペーンを一生懸命、學習して同盟内に持ち込むのが闘の山です。

かくして我々が第二回大会の成功を当面の組織目標としての同盟再建と連赤総括の核心たる「過渡期世界論」の総括＝防衛・継承・発展とは、とりもなおさず反赤軍派キャンペーンの種々たる理論的攻撃を反批判し撃滅することであり、かつこれを成果にして「過渡期世界論」を発展させることを意味するのも当然なわけです。

対応を取る人もいます。いずれにせよ、さしたる内容も経験＝実践もない輩が、我々が獄中にいることをいいことにして、したり頗をして同盟を引き合いに出し、コケにして、自己のどうしようもない商標を売りさばかんとする事に対しても我々が怒りを表明しておくのも、いくらかの意味を持つことでしょう。

このような誹謗・中傷を旨とする批判に対しては、読者が正當な客観的態度・判断を維持し得るよう私達は「過渡期世界論」に関連する必要最低限度の文献は復刻すべき必要を感じます。このような観点に立った場合、「革戦派」グループの諸君が、「同盟機関紙総特集」を刊行してくれたことは意義多いことです。又、この総特集を補完する意味あいで、「ゲバラ＝カストロ路線と我々」（峰火五号掲載・六七年一月）・「8・3論文」（第二次ブンド・六八年八月）を復刻します。少なくともこのような復刻作業をもって諸君は一定程度、反赤軍派キャンペーンや清算主義の輕重浮薄性を感じとられるものと思ひます。是非とも読者はこれらの復刻された文献を検討し、同盟の政治的歴史を理解し、論争への正しい前提を獲得されるよう要望するものです。

「過渡期世界論」への批判や意見は以下大雑把に分類して七つ位あります。

その第一は戦旗派・日向君や最近の千葉君の如き純正小ブル反スターロックィズムの立場からの批判です。

第二は中間的小ブル反スタトロッキズムの連合ブンドのいわゆる十二・十八路線（共産主義十四・十五号掲載）その特殊な一支流としての赤報派の批判です。

その第三は同盟右翼清算派の臨総パンフに代表される第二の見解を部分的には手直しつつも、しかし全体的には、ほぼ直輸入した烈切見解です。

その第四は小ブル教条派のその一部の反スタ主義の見解、これも基調は第二の見解と同一のものです。この特徴は、実践上は反清算主義で「左」からの清算主義の傾向を持つていることです。

第五は、これまでの四つの見解の如き小ブル反スタトロッキズムの観点からは違って、その意味で健康な性格を有した「査証」六号の「デイルヤシン作戦勝利万歳！」のVZ8の来見論文や、アラブ赤軍の「新左翼」紙や「序章」誌に投稿された見解です。

第六は、一・四の反スタトロッキズムの見解に反発する余り毛沢東思想に溶解し、「過渡期世界論」を発展させたと称するような見解です。

第七に、仏派の諸君は我々に何のことわりもなく「過渡期世界論」を継承・発展させるとか、「世界共産党史観」と称して、われわれの「過渡期世界論」を小ブル反スタ主義に矮少化しているが、我々に対しては赤報派の諸君と同じ「毛沢東思想への屈服」というレッテルをはるだけにとどまっている。その他

さて、我々の「過渡期世界論」の継承・発展の対象に「12・8路線」と赤報派にしばり、且つこれとの関連でその他の反批判を進めてゆく方法を取ることについて今一度整理しまとめてみる。

その第一は、「12・18路線」に関して我々は「論叢」¹で概略的位置付けをやり終えていたわけですが、同盟の影響力に解体されることを恐れ「スタ・反スタマルクス主義の克服」と称して我々にスターリン主義のレッテルを貼り、中間的反スタマルクス主義の域にとどまり、69年以来、一貫して日和見主義であり又、武装斗争から召換するために党派斗争至上主義であつたが、資本主義批判を軸にして反スタマルクス主義批判の志向と一定の内容を提示したが故に一定の歴史的意義をもつていてこと、それ故に同盟に一定の影響をおよぼしたこと。

その第二は、「一向過渡期世界論」を継承すると称しつつも、実際は「資本主義批判一党」を一般的に強調し、また、「反スタ・反スタマルクス主義の克服」と称しつつこれを「スターリン主義で無政府主義」と中傷して7・6以後の赤軍派の斗いを承認せず「過渡期世界論」の清算を行なつてゐるが故に、「過渡期世界論」を継承しているかの如き幻想を与えること。

その第三は、「過渡期世界論」の批判がその実質的内容は、反スタトロッキズム——反スタマルクス主義の内容に過ぎないにもかかわらず、それが一方で「反スタマルクス主義批判」の看板を掲げているが故に陰蔽されてしまい、又批判者達が往年の第二次ブンド時代の同志達であり、そのくせ決定的時点で脱落していった人々であり、我々の事を熟知しているが故

火派の諸君や、佐野君などもいるわけだが、仏派、派佐野君など含めて基本的には、第二の「12・18路線」に基づく「過渡期世界論」の枠内にある見解と考えても差し支えない。

さて、このような批判や意見が概観されるわけですが、同盟のこれまでの政治的・理論的発展の歴史からして①～④の反スタトロッキズム・反スタマルクス主義の見解とは徹底して見解に影響されている以上、①②の批判は至上命令的です。しかも①の純正反スタトロッキズム・反スタマルクス主義の見解は、一定の批判的伝統がブンド系左翼の中に定着している以上、それ程力を注ぐ必要は無いわけだが、②の12・18路線に関する見解では簡単に看過するわけにはいきません。

以上からして我々の課題たる「過渡期世界論の防衛・継承・発展」とは、とりもなおさずその最大の代表格的批判者たる七〇年末の連合ブンドの「12・18路線」とその特殊一支流たる赤報派への批判に当面の主力が集中されるのは当然のことです。そしてこの批判との関連で清算派等の烈切グループの意見を批判してゆくことです。

に、批判がペテンにも拘らず詳細で現実性を持っているかの如く映り、ダメされやすいこと。

以上の三点からして「12・18路線」による過渡期世界論の批判は一定の歴史的意義を持ち、批判の代表格的位置を占めている。（おそらく、「共産主義」¹号の「わが同盟の立脚点」の執筆者は鈴木君か旭凡君だらう）

第四には、この「12・18路線」を榎原式に再編しつつ、赤報派が連赤敗北につけこんで、小黒寛よろしく「革命戦争派」を自称して、「過渡期世界論」を批判し、反赤軍「キヤンペー」に血道をあげ、のさばりかえり、単なるサロンマルキストの日和見主義分子の正体が覆いかくされ一定の幻想が生まわれていること。かかる状態に規定されて、同盟内外に一定の清算主義の基盤が醸成されていること。

第五に、それ故にこそこれらの健右たる「12・18路線」を一度批判の俎上にあげ、全面的に批判的検討を加えつつ、臨総パンフを初めとする他の種々の批判、意見の検討に入る順序を取りた方が聰明であること、等の諸点です。

第三章『反スタ』にかこつけてマルクス主義経済学を修正する榎原君の経済学を批判する連合ブンドの「12・18路線」は「共産主義」¹号に表現されています。この論題に関する限りで我々が検討しておかねばならないのは、主要には榎原君、旭凡君の

宇野批判に代表される反スタマルクス主義と両君の経済学です。

第二は十四号に展開された「我が同盟の立脚点」を構成する、「我が同盟の過渡期世界論総括」「世界プロレタリア独裁の綱領点諸問題」の二つの論文です。我々の批判に関しては、彼らは前者を強調し、反スタマルクス主義の批判がないとか、自らの中間的反スタマルクス主義故に黒田理論を密輸入して「スターリン主義」だとかのデータラメな批判をおこない、これを主張点にして、「世界プロ独立」の主張を強調しつつも結局は過渡期世界論のエキスたる、②階級斗争の世界史的攻撃段階（つまり、世界革命戦争の形態をもつ世界プロ独立運動の段階）——世界武装プロロへの到達のテーマ、⑥現代帝国主義の恒常的な国内的、国際的侵略抑圧反革命戦争となし崩しファシズムの階級危機という特質と、これに規定された発展途上国の民族解放——社会主義、先進国の前段階決戦＝攻撃的峰起＝プロ社会主義革命戦争、プロ国家の根拠地化と共産主義継続革命の必然性とその攻撃性能能動性及びそしてこの三プロック階級斗争の結合としての世界性、攻撃性等として位置付けられる逆制約の能動的テーマ。⑦過渡期世界のかかる特質を止揚するものとしての世界プロ共産主義革命（世界同時革命）——世界プロ独立世界赤軍世界革命戦線の革命路線のテーマ、という三つのテーマを放棄、清算していくています。

従ってこの二つの批判＝検討を踏まえて、最近の赤報派グ

に、その理論は、革命的実践抜きの單なる「理論」であり、革マル的な「他党派解体」が自己目的化された「為にする理論」であったこと。

第三に、それ故に資本主義批判という決定的に重要な課題に接近しつつも、その内容は階級斗争に対決する思想や綱領の獲得とは全く無縁であり、思想的には彼らの日頃の小ブルの傲慢さに鮮明なように小ブル性を払拭していかなかったこと。この革マル的な召換主義の「党派解体斗争」は赤報派の中に現在受け継がれているわけで、我々は現在の赤報派の諸君が七〇年末の連合ブンドのB斗争の主導勢力ではなかったこと——彼らは自らが斗ったの如きボーズをとっているが、むしろ中心は神奈川左派を中心とするRGの戦士達が斗ったのであること——と合わせて「第二次ブンド以来赤軍派フランクに顔を出したりひっこめたりして動搖していた榎原君の思想性・政治性がなんら変革されていないことを残念ながら確認しておく必要があります。これらのことば、清算派の言う「赤軍派発生そのものがあやまり」なる破廉恥極まる反動的主張のデマを暴く点でもしっかりと確認されていなければなりません。

① 反スタマルクス主義者——榎原君

榎原君が宇野経済学等反スタマルクス主義の枠を突破できず、基本的には反スタマルクス主義の手直しに終わっていること、単なる中間的な反スタマルクス主義でしかないことは、

ループの批判をおこなえばいいわけです。この検討に際しての我々の批判的立場を記しておきますと以下です。

第一に、彼らは意識的に「赤軍派は党建設の観点がない」とかのデマを流し、彼らの現在を「党」を赤軍派に對置した成果の如く述べるわけですが、これは嘘です。赤軍派は党建設を重視しなかったわけではない。これは我々の論文を参照すれば一目瞭然です。又、彼らの党は本質的には、党の革命を通したプロ党建設の斗い、前段階武装蜂起＝革命戦争を日和の為の主張でしかなく、彼らの結束力は全く皆無で、最初は反赤軍派で日向や叛旗を含めて野合し、その後は関西ブンド・神奈川左派・仏派の無原則的な野合、そしてこの第二次連合の三分解と関西ブンドの烽火派と赤報派への分裂をおこない、時がたてばたつ程、四分五裂し櫛の刃が抜けるようゴボしていった始末を、何が「赤軍派に党を対置した成果」と誇れるだろうか。全く、馬鹿も休み休みいたまえだ。7・6の第二次ブンド分解と赤軍派の結成は歴史の必然性であり、我々の党建設の斗いは相対的に一番正しかったのです。第二次連合派の「2・8路線」を基本的には、第二次ブンド||7・6以来の中間派の日和見主義と動搖の路線上に生まれたものであり、根本的に小ブル日和見主義と刻印されているのです。

第二は、彼らにあっての「党」主張は、実際は武斗や大衆運動からの召換の日和見主義を正当化するものであつたが故

彼が宇野経や黒田哲学に対し「俗流的な低俗な虚偽のイデオロギー」ということではなく、まさしく数々ある虚偽のイデオロギーということではなく、種々ある高邁なイデオロギーの「二大支柱として敬意の念を持って……見抜いてほしい」へ「共産主義」一四号、一四六頁）といつているように、彼はブルジョア御用理論家たる宇野、黒田を驚くべきことに「高邁なイデオロギー」として「敬意の念を持って」遇しているわけです。

「資本論以降、宇野経済学と梯経済哲学がその個々の内容に於て新しい問題を提起している」（同書一四七頁）と考えているに至っては、榎原君が反スタの名分に疑惑されてマルクス主義経済学の境界線を全く見失ってしまっているのは明らかなのです。否、彼が関西ブンドの中にまぎれこんできた最も異質な小ブル個人主義の反スタマルクス主義者であったことを表明しているわけです。

その他「①価値法則と剩余価値法則、②資本主義社会の生成・発展・消滅の法則性、③生産力と生産関係の矛盾等の対決点で、宇野経済学はスターリン主義を論破した。」一体どこを、どのように論破したのか！

スターリン主義は「史的唯物論を科学として指定しており、その結果、資本主義社会の生成・発展・消滅とか、生産力と生産関係の矛盾とか、科学のみによつては解決されない諸課題をも科学の課題として提出した」から「宇野はスターリン

主義を論破した」ことになるらしいが……。

我々はスターリンの諸論文をそのML主義の俗流化、教条化、一部の修正故に批判的立場をとるが、だからといって反対に名を借りて「史的唯物論は科学ではない」とか、「生産力と生産関係の矛盾は科学では説明されない」とかのマルクス主義を修正する意見を許容することはできない。君はマルクス主義を科学以外の何と考えているのか、驚くべき不可知論の神秘主義!

(2) 剰余価値法則、窮乏化法則の否定——ブルジョア国独

資論に影響されて「ボロボロ窮乏化」を否定する榎原君
榎原君のマルクス主義の最大の決定的修正点は以下です。
「資本の生産過程の内的作用を剰余価値の生産の面でのみ把
えて『剰余価値法則』なるものをデッチ上げ、そのことによ
つて資本の生産過程の内的作用の分析を単に剰余労働の搾取
の問題に歪少化する」(前掲書一五二頁)

資本主義を搾取の仕組みに企少化させ、その結果革命論の
根拠を労働者階級の窮乏化に求めざるを得ない」(一五二頁)

「価値法則に対し、剰余価値法則なるものを肯定し、そ

れによって資本の生産過程を分析することによってボロボロ

窮乏化論に陥り入っている」(一五八頁)

榎原君は反スターリン主義の色眼鏡をかけているが故に、
マルクス主義が踏みこえではならない重要な一線をやすやす
ていたが、資本主義の危機が激化している現在では、マルク
スの命題はますます正しさを証明しつつあるのです。

第一の点に関して敷延してゆけば、一体榎原君は資本論の
最大の成果をどこの点に見ているのか、剰余価値学説の展
開ではないのか、マルクスは何故「剰余価値学説史」を書
いたのかね。レーニンがいたるところで「搾取理論」とか「
搾取制度」とか使用しているのをどう考えるのかね。

「資本の生産過程の内的作用を剰余価値の生産の面で把え
る」ことが何故に間違いなのか、又、剰余労働の搾取の問
題に解消して何故悪いのか。

これでは、榎原君の観点では「資本の生産過程の内的作用
を、ここにおかれている労働の状態を分析していない」(前
掲書、五一頁)ことになるらしいが——確かにスターリン
経済学や日共経済学にはそのような側面がなきにしもあらず
だが、これは純粹経済学上の問題と、その政治経済的な「
労働の状態=労働制度」を混同するものです。確かに科学的
に指定される経済学上の剰余価値の生産の面と、その政治的
・経済的側面たる労働の状態・労働様式・労働制度(資本の
専制と賃金奴隸労働、賃金奴隸制度)とは不可分一体で、一面では
同一の事柄である。だが何の連関もなく混合して語るのは間違いです。
つまり、経済学上の「剰余価値の生産」という規定的目的
と推進動機を確定し、これに基づいて「絶対的・相対的剰余

と踏みこえてしまつたわけです。

つまり、第一はマルクス主義における最大の党派性たる剰
余価値学説(剰余価値法則ともいっていい)を完全に否定し
てしまつてのこと。第二はマルクス主義経済学の重要な党
派性たる窮乏化法則(絶対的、相対的な)を否定してしまつ
たこと。第三は、価値法則と剰余価値法則の同一性と差異の
関連がわからず、宇野の主張と同じように剰余価値の法則を
価値法則に解消し超階級化していること。この誤りが、ス
ターリンの「商品社会=価値法則、産業資本主義——剰余価
値法則、帝国主義——最大限利潤の法則」(ソ連邦に於ける經濟
的諸問題)の批判のあまり——この特徴付けは基本的には正
しいのだが、スターリンはこれでもって社会主義下の価値法
則を規定的存在と把え、ニセ社会主義を正当化しようとした
点が問題なのだ——宇野の修正主義に屈服していることから
発生しているのは明白である。

第四は、宇野達はスターリンを右から、ブルジョア御用理
論家の立場で批判したのですが、他方で宇野の悪業は現代帝
国主義の国独資の政策をブルジョア的に美化し、「マルクス
の窮乏化法則は古くさくなつて間違つてゐる」と吹聴してま
わり、恐慌や窮乏化の不可避免性を否定し、労働者階級を武装
解除してきたわけですが、我が榎原君はこの陰謀が見破れず
「資本主義のボロボロ貧困化」を否定しているわけなのです。
こんな主張は日帝の相対的安定期では一定のゴマカシを持っ

労働時間の延長(経済学上これを搾取と規定する)がめざさ
れること」が価値理論に基づいて理論的に解明されてはじめて
「生産過程の労働の状態」が科学的、階級的に、全体的に
解明されるわけです。

このような経済学上の理論的展開と、労働の階級的実態と
の関連についてはマルクスが「資本論」の中で統一的に展開
していますが、それと同時により深い意味を問うならば、労
働力は経済学上の範疇だが、労働は労働力の消費の状態であ
り、又労働は価値の源泉であるが価値そのものではないこと、
或いは価値、資本は、一部は資本としての労働力であ
り本質的には人と社会の関係であること等の関連の特
質に規定されているのです。

榎原君はこの「諸連関がわからず労働の状態を分析する
と称して経済学上の指標たる剰余価値学説を否認するわけ
す。榎原君は、マルクスが古典派の労働価値説を継承、再構
成し、労働と労働力の混同を排し、商品に表わされる労働の
二重性を起点に、資本家の利潤の源泉・生成構造を剰余価値
学説をもってはじめて科学的に労働者が搾取されていること
を証明し抜き、ことによつて賃金奴隸制を理論的に批判し、
労働者階級の自己解放の決定的武器を提供したことを虚心に
考えてみるべきです。

マルクス価値論を地盤とする剰余価値学説を放棄するなら
ば、プロレタリアの科学的な階級的党派性が失われ、「生産過程の
労働の状態は決して正しく解明されはしないのです。なお宇野の如く

〔価値論〕 価値法則さえあれば剩余価値法則さえあれば剩余価値法則はひとりでに導かれる」という風に短絡させることはできません。価値法則は資本主義を含む商品経済の法則ですが、それ 자체は剩余価値の法則を直線的に導くものではなく、剩余価値の生産は私的所有の労働力の商品化を契機とする資本制所有への発展と一体であり、これを条件として実現されるのであり資本としての労働力の消費たる賃金奴隸労働を介してのみ存在すること、ここには明白な差異があり宇野等のごとく「剩余価値法則は価値法則さえ知ったおれば証明される」といつて「實際は反革命的労働の資本制的性格を忘却視する——剩余価値法則を価値法則に解消してしまうのは全くの誤りです。

③ マルクス主義経済学の階級的党派性たる剩余価値学説
〔賃金奴隸制批判を否認し、「労働と所有の分離」に日和見的に一面化すること——「資本の生産過程の内的作用の価値論的解説の正体」〕

榎原君は剩余価値の学説を否定し「資本の生産過程の内的作用の、そこに於ける労働の状態の分析にもとづく価値論的作用解説」（一五〇頁・一五三頁）と大上段にありかぶって大見得を切つたわけですが、この主張はどのような結論に導かれていくのか？

②項でも触れたようにこの大見得の誤りの根源には④ 労働力と労働の区別がしっかりとされてないこと、又これを区別

去勢されてしまっています。

赤報派は結局「資本の生産過程の内的作用」この「価値論的解説」なるものを資本蓄積の一帰結たる（その限りで重要なのが）「労働と所有の分離」に短絡させてしまっているのです。

資本主義批判の本質たる「剩余価値の生産・賃金奴隸制」を「労働と所有の分離の法則」にすりかえることはプロレタリアの階級的党派性を換骨奪胎化し日和見主義化させるものです。

「労働と所有の分離」の証明は、直接的生産過程で証明されていると見えられないこともないが、常識的には蓄積論において「一方に於いて富の集中が、他方に於ける貧困の集中として進行する」（資本論）等の命題によつて展開されるべきものであり、「マルクスは『労働と所有の分離』の法則的解説をしている」とするのは飛躍があります。

④ マルクスが何故に「商品にあらわされる二重性」と表現したかわかつていなか榎原君

榎原君は「商品にあらわされる労働の一重性と、生きた労働の二重性の混同」を宇野批判を機軸に於て流通過程と生産過程の混同と前者への後者の解消（労働力の販売と購入の一つの行程の全く異なる二つの作用の同一視）、労働力商品化の資本発生の前提条件としての意義をその資本の実現条件

する意味が理解されないこと、労働力が価値（形態）であり、労働はその消費の状態であり、労働力は価値の源泉だが価値そのものではない。⑤ 価値や資本は本質的には人と人との結びつきの経済学上の社会的表現形態であることがはつきり理解され切らず、それ故に経済学範疇と政治経済的労働実態との関連が混乱していることに基づいているのですが、この誤りは資本の内的作用の分析を、第一には、マルクスがいまだ労働力と労働の区別を明確にし切れていた従つて価値論と政治、経済範疇が混合し、この矛盾が経済哲学的に隠蔽されている「資本論」や「経済学批判」以前の「経済学批判要綱」の地平に逆戻りされ、正に「資本の内的作用の価値論的解説」が何ひとつ「資本論」のレヴィエルでなされず、「資本家が労働者の労働の処分権を買い取る」（一五九頁）の如き曖昧な俗流的実態論に矮少化されてしまつていてこと。（これをお八木同志は「死んだ労働と生きた労働の交換」という誤った理論と合わせて密輸入して平然としていたわけです。）

「資本論」ではこんな権利と義務の独立生産者の関係として把えられるブルジョアの自由主義の残滓は存在しない。

第二は、生産過程の状態なるものがマルクス資本論で展開される剩余価値の生産と一体に、直接的生産過程や賃金論や蓄積論で展開されている、労働の賃金奴隸制度として総括される諸特質、諸実態が「所有と労働の分離」に一面化され、抽象化されてしまい、労働者としての資本への階級的告発が自然永遠的な概念を導入し、人間と自然の物質代謝のようなく（？）経済原則に、資本の生産過程に於ける労働の特質を解消したことを証明せんとしているわけです。が、この点が商品あらわされる労働とは結局は可変資本としての資本の消費を意味し、もともと資本の專制に基づく賃金奴隸労働を意味することとして指摘しつつこのことに対するブルジョア御用理論家たる宇野にあつては必死に隠蔽せざるを得ないことをすつきり指摘しきれないと等の欠点をもつています。

以上のこととは、結局はマルクス主義経済学とは、資本主義という特定の歴史的段階の労働様式—制度の分析を対象とし、この資本主義生産様式は商品経済社会であり、マルクスの指摘する如く全ての商品は使用価値と価値の契機で構成され、商品あらわされる労働は全て資本の下での労働であり「生きた労働」など存在せず、可変資本としての労働力の消費を意味し、価値や資本が人と人との社会的関係の経済的表現形態

である以上、それは資本の專制の下での奴隸労働とならざるを得ないこと等の基本的な観点がしっかりと把握し切れてないのです。

(5) 価値関係＝交換関係とする 誤り

榎原君は価値あるいは価値関係の本質が、商品経済社会に於ける人ととの生産を基礎とする交換、分配、消費も含む社会的関係の経済(学)上の表現形態であること従って資本家と労働者の関係は資本專制＝賃金奴隸制の下でのその總体が価値或いは価値関係であるわけです。どうもこのへんの問題がはつきり理解されてないことと関連し、価値関係＝資本と賃労働の交換関係と狭め、しまりに使っているわけですが、榎原君は価値関係は生産関係でもあることを理解してないようです。たとえば「労働力商品は資本との間の価値関係によって結ばれてゐるのではない」(「共産主義」十五号、一九五頁)というところに明白に見られるように、榎原君は宇野と同様に概念規定に於ては、「価値関係」とは交換関係と同一概念の上に立って、宇野が資本と賃労働の関係は「価値関係」といっており、榎原君はそうでないといつてはいるのに對し、榎原君はそうではないといつてはいるのです。両君はもともとの前提に於て価値や価値関係に対する把握が間違っているか、漠然としてしか把握されてないわけです。

労働力の商品化に関して、資本発生の条件と資本の蓄積の条件とを混同する誤りと同じ誤りを犯してはなりません。今一つは、資本の生産と蓄積という階級関係とは同一の事柄の二つの側面であったり、又相互前提関係にも個々の蓄積の局面ではなってることを忘れてはなりません。これ等の点を忘ねると、必ず宇野式の経済決定論の「科学主義が生まれるわけですが、榎原君も相当その傾向に感染しているようです。

(7) 「生産過程では所有をめぐる問題は提出されない」とデマリ召還主義としての日和見主義を正当化する榎原君

榎原君は、宇野派や社会民主主義者が労働力の商品化を資本蓄積の条件と見える觀点から、生産過程での所有をめぐる階級斗争の存在を主張し、組合主義、社会民主主義を正当化する見解を批判するのにかこつけて、「生産過程では所有をめぐる階級斗争は存在しない」とレーニンを歪曲しつつ主張し、自らの召還主義、日和見主義の正当化に利用しています。「直接的生産過程に於る資本の支配の内実を①労働に対する資本の指揮②強制労働③生産手段への労働者の従属、として把握する、これ等の根拠は階級斗争の根拠ではあるが、その斗争の質は所有をめぐるものではない。レーニンが正しくも、雇主との斗争は組合意識しかもたらさず、社会民主主義意識はこの関係の外からもれなければならない。たとえば直接的生産過程に於て所有の問題を提出した場合は——「賃金労働制度徹廃」としてストライキ化し得るが——この要求を工場で雇主に

(6) 資本の生産と階級関係の関連の混亂

榎原君は資本(価値、剩余価値)の生産と階級関係の生産と再生産の関連について、少々混乱した把握をしているようになります。

榎原君は、しきりと資本の生産が階級関係を生産、再生産することを強調し、資本の生産の前提条件に階級関係をもつてくることに反対しているわけですが、これは一応正しい指摘ですが、この際も、両者の関係に歴史的考察を加えておかないと、経済学が史的唯物論を前提にして、又逆に経済学をもつて史的唯物論はより深められて科学的に立証されてゆくという両者の相互前提的循環関係を正しく捉えて主張すべきです。つまり原始蓄積をもって直接的生産者と生産手段が暴力的に剝離され、この過程を経て小生産者や商業資本が産業資本に発展され、「重の意味での自由な労働者」が生まれたこと、この過程は暴力的な階級斗争を通じて形成されること。

つまり、資本発生の前提には員の身と員殻の如き、固く結合した直接的生産者が暴力的に解体され、一方では生産手段が資本の下に集積、集中し、他方では自由な労働者という階級関係が前提にされていること。しかし、ひとたび資本は発生するや自らの足で立ち、自らの生成の前提条件も資本の生産と蓄積の中で再生産してゆくこと。このような、資本と階級関係は、最初后者が前提であり、その後結果になったこと、としての循環関係をもつてているのです。我々は、宇野の如く、

対して主張しても、大衆を獲得し得ない。雇主との斗争、直接的生産過程に於ては所有をめぐる階級斗争の根拠は存在しないのです。」(「共産主義」十五号、一九九頁傍線は筆者)

榎原君は初め、前段階武装蜂起や武装斗争に反対し、「ソヴィエト運動」とか「階級的労働運動」とかをデタラメに主張し、第二次ブンドの革命的左翼に反対し、又赤軍派に反対し、七〇年末になって最早下部のつきあげにあって武斗が避けられなくなるや、今度は一転して、完成に召還主義の「左翼日和見主義になり、「武斗」や「非合法」の名文をもつて生産点での革命的斗争の推進に自らが拘り合い、前面に引き出されてしまうことを警戒して「生産点では所有をめぐる階級斗争は提出されない」外から持ちこまれる」と称してレーニンを歪曲しつつ、生産点での革命的階級的斗争を切り捨て否定してしまったわけです。

結局は、榎原君の「宇野批判」なる大げさな商標は「宇野批判」にかこつけて、自らの日和見主義を召還主義・党派斗争・矛盾、共産主義の不可避性のこと、と考える)は提出されない」のだろうか? 「賃金労働制度の徹廃を工場で提出しても大衆を獲得し得ない」のだろうか? 断じて否である。直

接的生産過程を起点にして所有の問題が提出されなかつたら、一体どこで提出されるのか、「賃金労働制度の徹廃」という

スローガンを掲げて大衆を獲得できない」としたらマルクスは「

主義は否定されることにならないだろうか」マルクスは「公正なる賃金を要求して、賃金斗争のギリラ戦に埋没するのではなく、賃金奴隸制度そのものの廃絶をめざすべき」と主張しているではないか。レーニンは、雇主と賃労働者の資本主義的関係の中からは自然発生的にはML主義の共産主義意識と路線は産み出されないこと、これは資本主義的意識の外部で科学的に初めて獲得されることを主張したが、だからといって工場での雇主との斗争の中からは共産主義が生長しないとは言つてないし、正しい路線に基いて組合主義や改良主義や諸ブルジョア路線やイデオロギーと斗うならば所有の問題は提出され、共産主義は工場の中でも成長していくのは当然のことです。

「共産主義の階級的意識は資本主義のイデオロギーと斗いつ、この外部で科学的にのみ獲得される」というレーニンの有名な命題を榎原君は、工場の内と外の空間的次元の問題と混同して把えたわけです。これでは「工場での斗争は、全て組合主義の改良主義になり、生産点での階級斗争の革命的推進を完全に放棄するわけです。(勿論、これのみが階級斗争の主要形態と考えるのは間違いで、レーニンも指摘するが如く、国家をめ

⑨ 「反スタ修正主義経済学としての榎原経済学——まとめ
以上、榎原君の「経済学」なるものを概括的に特徴付けるならば以下のことがいえます。

剩余価値法則の否定、窮乏化法則の否定、修正主義・資本主義観たるブルジョア国独資論に立脚して「資本主義ボロボロ貧困化論」の否定、経済学上の範疇としての、剩余価値の生産」とその実態たる政治・経済的な労働の状態の側面との混同。労働力と労働の区別の曖昧性、価値の本質的・階級的特質の意義の無理解、資本の生産過程の内的作用を、そこに於ける労働の状態を解明しつつ、価値論的に解明する」と称して、逆に価値論以前の、「資本論」以前の「経済学批判要綱」のレビエルに逆戻りさせ、俗流的「労働の処分権論」を持ち出したりしてマルクス価値論をぼやけさせ、あげくの果てには、マルクス主義経済学の最大の階級的党派性たる「剩余価値法則と賃金奴隸制」の規定を日和見主義の一面的な「労働と所有の分離」にすりかえること、何故にマルクスが「商品に表わされる労働の二重性」としたかがはつきり見えられないなど、等に見られるごとく、マルクス主義経済学のほとんど根本的諸命題や、重要諸命題を否定したり修正したりしていることは明白です。明らかに榎原君の経済学は修正主義の

ぐる政治斗争が最も重要な階級斗争の形態であることは至明です。他に理論斗争が存在するが。」

⑧ マルクスの「資本蓄積を通した革命の不可避性の論証」の立場、方法、観点の否定

「資本の生産過程の内に所有をめぐる階級斗争を見てしまふと、資本の蓄積と共に階級斗争も蓄積され、その結果、革命の必然性が理論的に明らかにし得るかの如き、幻想がうまれる……」(前掲書二〇三頁)

これは明確にマルクスの「資本蓄積の一般的傾向」等に典型的花される資本論の方法や主張を否定する主張です。マルクスは「剩余価値の生産の分析を開拓しつつ、資本の蓄積の諸節の中で「方々の富の蓄積が他方での貧困の蓄積となり」「無知、貧困、道徳的堕落、頽廢……が蓄積され」「組織され訓練されたブルジョア階級が成長」「収奪者が収奪される……」等の展開をしているが否定され、修正されてしまつているわけです。

又、「生産の社会化と所得の資本主義的私有利の矛盾の増大」の史的唯物論的基本命題の論証が否定されてゆくのです。要は、榎原君が、マルクスが資本の生産と蓄積の分析を通じてこの分析にとどまらずこの分析それ自体が、資本主義と共産主義の科学的規定性、その物質的諸条件、道筋等を解明したこと、この資本論の立場、方法、観点を否認してしまつているわけです。

偏向が多分に見られます。

これは一つには榎原君その人のマルクス主義理解の浅さ、無知や、或いは、彼の日和見主義によるものもあるわけですが、このような要因と同時に次の事をしっかりと留意してください。つまり、彼が戦後新左翼運動に付着していく小ブル反スタ主義の世界觀に染まっており、この新しい日和見主義、修正主義の立場からスターリン主義を批判せんとするが故に、スターリン主義の修正主義の中に教条化され俗流化されるとはいえ、なお一定程度内包されているML主義の真理を反スタにかこつけて、押し流してしまうことにあるのです。「スターリン主義」の革命的ML主義の立場からの批判は尙まだ端緒についたばかりであり、安易にして卑俗な戦後族生した反スタマルクス主義者群のブルート状態を見れば明白ですが、榎原君も過渡期世界の攻撃的階級斗争史觀を放棄し、スターリンに対する正しい態度がとれないと理

我々は「反スタの名分」にかくれてML主義を否定してゆく、このようないな謀に決して乗せられてはならないのです。又このような新たな修正主義の実践的帰結として、彼の召還主義の政治組織路線が生まれてきていることをしつかりと理解しておるべきです。

このことについては後述。

(10) 旭凡太郎君の経済学の特徴についての断片

尙、旭凡論文「宇野労働力商品化論批判」「宇野経済政策論批判」は榎原君のような決定的修正、誤りは比較的小いが一たとえば一応、価値の階級的意義付けや「労働と所有の法則的解明」に一面化していないこと。価値関係＝交換関係等の誤ちは犯していないこと——だが、榎原論文はさておいても、一応、直接的生産過程の分析をおこなってゆこうとする志向があるのに對して、そのような現れとして資本の内的作用の特徴付けとして②資本の指揮、⑥強制労働、⑧生産手段への労働の從属を正当に指摘しているのに対し、旭凡君も榎原君と同じように剩余価値の生産と直接的生産過程を中心とする賃金奴隸制の問題がしつかりと押え切れてないこと。賃金奴隸制を直接生産過程—蓄積論を貫通するものとして特徴付けず、蓄積論の所産としてのみ把える誤りがあり、直接的生産過程における剩余価値の生産と賃金奴隸制の批判を欠落させることによって、労働者の階級意識の芯棒を空洞化させていること、これが彼の日和見主義の理論的表現であること、又これも召還主義を正当化する誤りを犯していることは言をまらない。

しかし、本来旭凡太郎君は第二次ブンド時代の私の親しい同志であり、本来學問的に小ブル反スターリン主義の流れではなく——市大の経済学部は代々木系である——これを克服せんと

義分析、三プロツク分析などは、全く皆無、従つて、世界——日本プロ独、革命戦争の物質的意義付けなどは全く皆無——また、トロツキー主義を批判し、後期レーニンや毛沢東思想を評価する観点が全くない。

②具体的な過渡期世界分析や、國際共産主義運動史の総括のかわりに「¹⁶」を空論的に剽窃、ゴジラ的に極大化しつゝ、空論的、理念的に目玉商品として「共産主義論」や「世界プロ独論」を特殊に強調し、「スターリン主義との対決点」を無媒介に「民族共産主義」とか「連邦主義」とか、全く実践上の意味をもたない点に論点を設定してしまっていること。

③このような小ブル傲慢主義の理念主義の觀点から、スターリン主義との國際的党派斗争の觀点がない」と愚にもつかない批判をやるわけです。

この批判をもつて、當時既に「過渡期世界論」の中に孕まれていた後期レーニンや、毛沢東思想を評価せんとする志向を完全に清算せんとしているのです。

スターブハ綱領の批判は「世界プロ独（統一共和制）」とかを無媒介に抽象的に強調することで乗り越えられるものではなく、現代帝国主義の分析を基礎として、先進国プロ独・社会主義革命の前段階決戦、農業・植民地国プロ・ヘゲのもとでの民族解放・社会主義革命、プロ国家の根拠地化と継続革命と三プロツク革命の世界的結合としての実践的路線

する志向性を持っていつつも、日和見主義故に私とともに決起することを日和り、脱落し、中間的反スターリン主義と接触し、逆に我々を「スターリン主義」と批判する理論活動の先頭にたつことによつて政治的中黒「」を入れる思想的立場の矛盾の激成故に、破滅せざるを得なくなつたわけです。

第四章 小ブル傲慢主義・空論主義の反スターリン・トロツキズムからの『過渡期世界論批判』

反批判す

「共産主義」十四号の「我々の立脚点について」での「過渡期世界論」批判は、「我々の立脚すべき地点」についてと「赤軍¹⁶」についての批判を、七〇年末の段階で連合派（現在の烽火、赤報、神奈川左派、仏派）がおこなつたもので、この執筆は、どうも鈴木君（か旭凡か？）のようです。いずれにせよ、私の第二次ブンド時代の同志、しかも神奈川左派の諸君の執筆のようみえます。

周知の如く、神奈川左派の諸君は、私とブンド主流派を形成した諸君であり、それなりに良心的に、「過渡期世界論」を総括しようとする姿勢は、部分的には見受けられます。

しかし、その批判の全体的特徴は、自らを中間的反スターリン・反スターリン主義の立場において、①現代過渡期世界—日本資本主義を、正しい方法的立場にたつて批判リ分析するのではなく——現代帝国主義、日本資本主

によって、はじめて批判されるべきものなのです。

以上からして、この「立脚点」の最大の特徴は、ブンドが所有する革命的リアリズムの感覚が完全に忘れ去られた、もつと空論的な小ブル傲慢主義によって刻印されていることです。以下、愚にもつかないことへの反論のようですが、沈黙しておれば批判が市民権を得て、我々が承認したかの如き印象を与える、こんな事態を政治的に利用する人もなきにしもあらずなので一応の反批判をしておきます。

① 「ロシア革命をもつて階級斗争が受動的性格から攻撃的性質に変化した」という觀点は誤りか。これを「法則的に把える」のは誤りか。

旧連合ブンドや反赤軍派の人々は、自らの日和見主義故に、この命題に狂人じみた批判を集中するわけです。そして彼等が批判を強め強める程、逆に彼らは増々日和見化してゆくのです。受動から攻撃への変化の客観的、物質的根拠は、帝国主義そのものです。私はこの点をくり返し常に強調してきていました。帝国主義の「独占—金融力頭制・過剰資本の形成と市場再分割、永続的な帝国主義戦争」「腐朽性と畜生性」「死滅しつつある資本主義」「プロレタリア世界革命の前夜」あるいは「超巨人金融独占体」等々として。従つて、私に主觀主義とかの批判をするのは、全くあたらないわけです。私は攻撃的階級斗争を帝国主義それ自身の内的基礎から裏付けんと

していること。だが、これのみでは、全く不充分なのです。正に「受動」とか「攻撃」とかの、主観的能因を含む概念を使用している以上、主観的諸条件が検討されて論証されねばなりません。尚、「主観的諸条件が入る以上」「法則（科学）」として提出できないと考える人は愚かです。唯物史観は、その法則をその物質的基礎から説明するが、上部構造の要因（その下部構造への反作用などの）を無視したり、それを法則の中に組み入れることを否定しはしないし、このことを否定する人は機械的唯物論の経済決定論者です。又、単純な帝国主義一元論からは攻撃的階級斗争を立証することは出来ません。つまり、ロシア革命の成功はそのロシア革命を導いたロシア人民の斗いとその指導部の経験・世界觀たるマルクス・レーニン主義の正しさを、完全に実証したこと、そのことをもってロシア革命の経験が、マルクス・レーニン主義として、普遍化、一般化され、全世界の労働者人民の武器となつたこと、マルクス主義が、マルクス・レーニン主義として発展させられ、階級斗争を前進させる決定的な規定的要因となつたことが最大のロシア革命の成果なのです。主観的能因が客観的要因に転化したこと、帝国主義の物質的基礎とML主義の主観的条件が融合し階級斗争の攻撃的段階が創生されたこと、これは実態的には、レーニン在世中を典型とし、二〇年代に於いてロシアを根據地として、コミニテルンの創設とこれを

る為に、又、国際プロレタリアートの攻勢を鎮圧するために、ソ連と国際プロレタリアートの恒常的、国際的反革命包囲体制と国内国家独占資本主義体制と、なし崩しファシズム体制を敷いたこと、このことがソ共をスターリン主義に変質せしめたが、逆に帝国主義内共産党（とりわけ農・植民の）を左傾化させ、今度は帝国主義の内側から国际性、軍事性、社会性が強まつたこと、又、三〇年代には帝国主義間戦争が避けられなくなるや、ソ連を帝国主義間戦争にまき込み、包摂し、国際プロレタリアートを「反ファシズム」の下に包摂しようとしたが、国際プロレタリアートの大半はこの反革命的裏切り路線によつて混乱させられ、武装解除されたが、アジアにては、これを逆手にとつてプロレタリアのヘグモニーをもつて、反ファシズム統一戦線を開けてゆく事態が生まれたこと。つまり国際帝国主義の攻撃、スターリンの変質という事態の中で、帝国主義の一勝利それ自体の中で、二〇年代の世界史的階級関係＝攻撃的階級斗争は国際帝国主義に媒介され、そこに内面化されて發揮されたのです。その典型例として中国革命と中国共産党の前進を生み出しているのです。攻撃的階級斗争は帝国主義の運動それ自体の中に内包されて貫徹していったのです。

レーニン死后は、反スターリン主義の小ブルー派慢主義の観点にたつて、二〇年代のコミニテルンの斗いや、三〇年代を中心として開始された毛澤東思想に導かれたアジア共

通じての先進国、農業・植民地国を問わざる國に共産党が建設され、民族解放民主主義斗争や労働運動とML主義が結合されていったことでも明らかです。

比較的二〇年代は誰れでも現象的にも階級斗争の攻撃性について認めます。それは、スターリン主義が生成した三〇年代や四〇年代はどうだろうか？ この時代では、この命題は誤りだらうか？ 否です。小ブルー派反スターリン主義者は、その後の日共とコミニテルンのスターリン主義者は、その「間違い」とい、「スターリン主義を美化する」と躍起になつて批難するわけですが、この意見は、その後のスターリン主義にも拘らず、ロシア革命とその成果は、それ自体として（正に帝国主義の客観的条件とML主義の主観的条件の統一として）、既に国際プロレタリアートの力へと物質化されてしまつたことと――二〇年代のソ連、これを引き継いだ三〇年代からの中・朝・ベトナム等アジア共産主義運動の前進として――を忘れてはいるが、認めようともしていい見解です。確かに二〇年代末から三〇年代（とりわけ七回大会以降のコミニテルン）のコミニテルンの路線が誤っている以上、党的路線の是非によって「階級斗争の攻撃性・能動性」はその大半を決定される以上、階級斗争が後退したことは事実です。しかし、次のことを確認すれば階級斗争の攻撃性は、充分、法則的に貫徹されている、といえるのです。

国際帝国主義は、ソ共とコミニテルンを内外から変質させ

産主義の戦後に至る革命的斗いを否定する人々ならしさ知らず、まがりなりにもこれ等の歴史を承認する人ならば階級斗争の攻撃性が法則的に展開していることを容認するのは当然です。小ブルー派反スターリン主義の色めがねをかけているが故に、国際共産主義運動を正しく総括し得ず二〇年代のコミニテルンの斗いや、中国共産党の斗いを否定してしまうが故に、我々に對して「世界武装プロは存在しない」とか「スターリン主義を美化する」とかの中傷をやり平氣でいられるのです。

尚、我々のスターリンに對する態度は、「論叢16.3」でも展开了ように、反スターリン主義の立場、方法、觀点での批判はおこなわない。我々は基本的にはレーニンに對するスターリンを、マルクスに對するカウツキーの位置の如く考え、最初は、レーニンを忠実的に繼承せんとする志向をもつていたこと（この点でトロツキーやブハーリンを區別する必要があること、又、その結果は別にして）しかし、根本的な非マルクス主義の資本主義批判の不在の小ブルー性と過渡期世界の革命にこたえきれず、先進国革命では獨に於いて前段階決戦＝プロ革命戦争に挫折し、農業植民地国に於いては、プロヘグド下での民衆革命に挫折し、自國に於いては根拠地化と繼續革命の斗いに挫折し、總じて三プロックの革命とこれを世界共産主義・世界プロ独をめざし世界革命戦争＝世界党――軍、下で斗う路線に挫折し、三〇年代スターリン本來の小ブルー性を露わにし、反動化していくこと。

そしてこのスターリン主義の、レーニン主義の継承と挫折、裏切りの地点を乗り越えて、毛沢東はプロヘゲの下での民民革命と根拠地化と継続革命の斗いに成功し、現在残り一つの課題たる先進国革命の課題に直面しているのです。つまり我々は、三つのテーブル・三プロツクターテーブルの観点から、スターリンを批判するのであってそれ以外の観点から批判するのではない。

②「根拠地国家論にもとづく攻撃型階級斗争の決定的誤り」という批判の決定的誤り

確かにソ連一国でみれば三〇年代のスターリン主義の反動化、その後の四〇年代のスターリン死後の社会帝国主義化と、根拠地の役割を果してはいないがこれに中国革命を加えるならば、二〇年代のソ連、四〇年代以降の中国と軍事実態的にも根拠地の役割を果しています。又、三〇年代のスターリンの反動化の時代も帝国主義がスターリン主義を内外から反動化せしめる行動それが自身が、國際帝国主義の内部に内面化され、内包的に中国革命の前に象徴される攻撃的階級斗争を貫徹させざるを得なかつたことを考へるならば、この命題は全く正しいのです。「プロ国家が直接にか間接にか攻撃型階級斗争を生み出す」根底は、ロシア革命がその後、スターラの変質にも拘らずML主義が人民の武器となり帝国主義の危機と主体的なML主義の路線の普遍化・世界化・組織化とする観点をもち、この観点で「プロ国家根拠地論」を展開しているのです。が、連合派はこのことがわからず「スターリン主義との党派斗争がない。世界プロ独の観点にたって、スターリンハ綱領を批判していない」とかの誹謗を並べたて完全な小ブルノイド慢主義の左翼空論主義を展開しているのです。

尙、過渡期世界の「プロ国家が、根拠地化するか否か」は、当然にもプロ党の路線にかかわりあうことであり、それ故にコミニテルンの路線が検討されなければならないわけですが、しかし、スターリンハ綱領を、「世界プロ独がない、連邦主義・民族共産主義—党・軍の世界党・世界赤軍への改組がない」などの、プチブル反スターリン主義の空論的観点で批判すれば、根拠地国家化するわけではないことは明らかです。スターリンハ綱領を無媒介に最大限綱領主義的に「世界プロ独がない連邦主義・民族主義」とレツタルをはつてもなんの前進もないこと、この点、我々のスターリンへの態度は(1)で前述したし、スターリン主義への党派斗争が欠落しているわけではなくないこと。

尙、留意しておきたいのは、このスターリンハ綱領の批判の観点は「16.4」(赤軍派政治理論機関誌一六〇一八頁)の剽窃であること。「16.4」はこのような「左」翼空論主義の傾向を完全に払拭してはいませんが、それにしても我々の意見を剽窃しながら、逆にそれでもって我々を批判するとは、

結びついて、それ自体として巨大な力へと物質化されていましたことにあります。まず批判者はこの客観的变化を認めるべきです。このような特質として階級斗争の世界史的段階が形成されているのです。

私は攻撃的階級斗争の要因を軍事実態論の側面でのみ展開しているのではないこと、ロシア革命以前との相異としてのレーニン主義のマルクス主義としての人民の武器化という思想・政治＝路線面での前進を問題にしていること、又、ML主義を継承した毛思想の生成という路線・党の観点から問題にしているのです。これと軍事実態的に「根拠地の役割を果すか否か」は、ML主義を正しく適用、発展し得たか否かの関連として派生的関連として把えるわけです。この点に関して「我々の立脚点について」では、階級斗争の到達段階、或いは成熟段階を、軍事実態論風に、ソ連プロ国家の成立を強調し過ぎて説明するキライはあつたが。

「プロ国家根拠地論」を否定する人は、その階級的・政治的本質に於いて実質は反スターリン・トロツキストであり、後期レーニンや(これを忠実に継承せんとした二〇年代初めのスターリン)毛沢東思想を否定し、マルクス、レーニン、毛沢東に對して、トロツキー的世界革命の空論を対置する人々なのです。

一向過渡期世界論の一つの歴史的意義は、一方では、左翼空論的トロツキズムの残滓を持ちながら、一九六七年当時革

何んと卑劣極まるとか！

③「階級斗争に発展法則はないのか?」「過渡期世界論は史的唯物論の悪しき体系化か?」「攻撃的階級斗争は一つの『思い込み』で恣意的設定なのか?」——反スターリン主義のベテン的批判

「ロシア革命をメルクマールとして受動から攻撃＝能動へと転化したという主張は何か階級斗争に発展法則があつて、ロシア革命によつて攻勢段階に入つたとするような史的唯物論の悪しき体系化への傾斜が含まれているがそのような『一つの思い込み』によつては、スターリン主義との国際的党派斗争の勝利の方向を指示することは出来なかつたのである。生産力と生産関係の矛盾による社会発展の法則その他、スターリン主義こそが史的唯物論の悪しき体系化の権化なのであって、我々に存在するのは唯物史觀のみなのです。」(『共産主義』十四号二七頁)

受動から攻撃に転化しているの命題については(1)で説明した。ここでは彼等が黒田哲学の立場にたつて、史的唯物論を彼等が否定し、歴史の発展が法則をもつて(科学的に解明されるものとして)展開されている、というML主義の根本的命題を否定してしまつてゐることです。マルクスが「社会発展を自然史的法則でもつて叙述する」(経済学批判)の観點は完全に忘却視されている。黒田哲学では「人間や実践がな

い」と、このマルクス主義の命題に小ブル人間主義的に反発して法則（や科学）の中には、人間の主観的諸条件は混入していないかの如きデタラメを主張するわけですが連合派もこの観点に影響されて「法則主義だ」とか史的唯物論の体系化などとかの愚かにもつかない批判を展開するわけです。

自然や社会の中に法則の存在を否定したら何が残るのか。マルクス主義は一挙に不可知論の神秘主義に降伏することになるではないか！

「生産力と生産関係の矛盾から社会発展の法則をとく」のが誤りだって！これは史的唯物論の基本命題ではないのか

攻撃的階級斗争はなんら一個人間の「思いつき」や「思い込み」ではないこと、ロシア革命をマルクス主義とする客観的事実なのです。いづれにせよこの文章は反スターマルクス主義の修正主義の本質が面目躍如としています。君達の唯物史観なるものを見せて欲しいものです。又、過渡期世界論は階級斗争の世界史的段階規定をふまえた上で、現代帝国主義の分析を機軸に、過渡期世界総体を分析し三プロツク階級斗争を分析せんとしているのであって、事実としても史的唯物論の体系化では全くないわけです。

⑤ 現代過渡期世界の批判たる現代帝国主義の国際的・国内的批判やその戦略・戦術として具体的・実践的にはおこなっていきません。

以上①～④までは『我々の立脚点について』に対する反論ですが、次に連合派がパンフ『赤軍』をこの批判の観点に立って批判しているのに反批判を加えておきます。

⑤ 「大歴史＝史的唯物論的領域、中歴史＝現実形態的な現代帝国主義を中心とする過渡期世界の分析、小歴史＝現状分析」とする三層的分析方法は誤ちか。

現代過渡期世界を分析しようとすれば、まず現代世界が資本主義から社会主義への過渡期（世界的な）であること、その歴史的特徴を正しくおさえておく必要があること。この上にたって、これを科学的に証明すると同時に、又、史的唯物論によってその正しい歴史的・階級的立場が確かれるところの、資本主義批判・分析が可能になるのであって、史的唯物論の正しい認識抜きには現代世界を資本主義批判のみによつては把えきれないこと、三層的分析は全く正しい規定であつて「観念的なスターリン主義の乗り越え」ではない。我々はこの立場・方法にたって「単純帝国主義一元論」やソ修式「体制間矛盾論」を批判しているのです。

④ 「帝国主義論に於ける自動崩壊論的傾向」なる批判について

「攻撃的階級斗争に対する帝国主義の反革命同盟と不均等発展の矛盾＝侵略と反革命の不統一→国内反革命という帝国主義論に於ける自動崩壊論的傾向である」（前掲書二六頁）

これは8・3論文（六八年八月）に対する批判らしいが、ロシア革命以降、國際帝国主義は世界史的階級関係の変化Ⅱ世界プロレタリアートの更なる成熟に規定されて帝国主義間の不均等発展の矛盾と國際反革命の共同利害とを統一しなければならぬ帝国主義にとっては根本的危機に陥着せしめられているという事実、この危機を國際反革命「体制」と、國際・国内管理通貨制による国独資・国内なし崩しフアシズムによって國際帝国主義は延命してきているという最も重要な現代帝国主義の特徴を否定することになる。

それ故に、この現代帝国主義の特徴から根拠づけられる恒常的侵略・抑圧・反革命戦争と階級危機、先進資本主義国のプロ独・社会主義革命前段階決戦、農業・植民地國の民族解放・社会主義革命、プロ国家の根拠地化と継続革命や、この三プロツクの階級斗争の世界共産主義をめざす世界革命戦争としての不可避免性の結合性とその戦略・戦術等が導かれず、世界プロ独や世界革命戦争を理念的に抱える日和見主義に陥入するのです。全体として、連合派の『共産主義十四・十五号』での特徴は、共産主義論や世界プロ独を文献学的に論じてはいるが具体的な

⑥ 「史的唯物論の悪しき体系化＝歴史哲学への転落か」「資本主義の否定的契機として階級斗争」を抱えるのは全く正しい指摘です。これを何故、否定するのか？「プロの世界性の開花とブルの一国性」（露呈）として、過渡期世界の世界史的階級関係を特徴付けることは正しい試みですが「プロの物的姿勢としての労働力商品が世界的であり、世界性をもつことに於いても自由で普遍的で世界的であるということに存在する。」（『16・4』三頁）この文章では私は「労働商品所有者」なる宇野式用語は一切使っていません。（第四章で八木同志がこの用語を使っていて、現在程、理論的には宇野批判をやりきれてなかつたにせよ）當時ですら、宇野の修正主義に影響はされていなかった。連合派は卑劣にも自らの「宇野批判」の商標を私が「労働力商品所有者」なる用語を使っているとデマリ、私をダンにして売り込んだかたわですが、これは全くの事実無根です。

プロを経済学上「労働力商品」と規定してはいるが、けつして「労働力商品所有者」なる用語など使用していない。この点で八木同志は自分のことは棚に上げて、『共産主義』十四号をウノミにし、原文を確かめもせず、私が宇野に感染したかの如く吹聴するわけですが、八木同志自らこそ宇野経の克服をめざすべきなのです。

「赤軍派の場合、藤本進治に依拠したまま」プロの物的姿としての労働力商品としたため何かしら資本が自然発生

的に世界武装プロを生み出す経済主義に転落してしまってい
る。」（前掲書三四頁）

確かに、赤軍派がその前身に於て、藤本進治の影響を受け
ていたことは確かですが、「赤軍」^{16.4}のプロレタリアート
の成熟の分析は、藤本進治の「革命の哲学」とは方法的に全
く異っています。藤本の場合は、プロレタリアを資本と資本
の蓄積の矛盾の中で分析する、マルクス資本主義批判の方法
ではなく、プロを「主観的生産力」として、先駆的に規定し、
かつ、それは「私有性と社会性の矛盾」を内包していると指
定し、この「二重性的矛盾」の自己展開のうちに、「革命」
「階級形成」の必然性を説くものです。これは、プロの対
象たる資本を捨象した、ヘーゲル的な、かつ主観的で、自然
成長論の客観主義を特徴としています。「赤軍」^{16.4}では、
こんな「自己展開論」とは全く異なる、「自由主義一貧民」
「農業資本主義一組織されたプロ」「帝国主義一民主主義的
プロレタリアート」等として不十分であり、対象たる資本の
運動から階級形成の諸段階を特徴づけようとしています。從
つて、連合派の批判は全く不当なわけです。尚、VZ一五八
の来見君が、これと同じような観点で「転びの弁証法」とし
て批判をしていますが（「査証」六号論文）これも当たらな
いわけです。

ストだ」という主張です。（「過渡期世界の革命」日向著）
これへの反論は、①②の反論で完全に論駁されているし、後
は、我々は、日向翔君が「私を乗り越える」と称して、妙な
野心を燃やして、一生懸命、黒田寛一の著作を読み込み、御
用理論家、宇野を自分の師と賞揚し、ブランドの歴史の中に革
マル主義の最大の堕落を持ち込んでしまったこと、その後、
全革命的左翼に総スカンを食い、やっと、革マルの幻想から
し始めた頃には、戦旗派は単なる赤軍派の反対派に過ぎず、
赤軍派の敗北とともに四分五裂してしまったこと、この事実
をしっかりとおけばよいのです。今は、日向君は聞くと
ころによれば、だいぶ毛沢東思想に共鳴し始めたとのことで
すが、これはよいことです。大いに、マルクス・レーニン主義
と毛沢東思想を学習し、宇野や黒田等の、ブルジョアジー
が人民の隊列の中に送り込んだ、御用理論家から解放されて、
「誠心誠意、潮流に抗って、人民に奉仕する」ことを実行し
て欲しいものです。決して「挫折」だと、なんだかんだの
理由をつけて逃亡しないで下さい。これが、かつて日向君が
「直弟子」（私は、こんな徒弟的、人身的関係をもつたも
りはないのだが）と称した人からの、せめての忠告です。小
ブル反スタ・トロツキズム、反スタマルクス主義から解放さ
れるならば、いつかまた、互いに肩を並べて斗てる時がくる
のです。

⑦ 「過渡期世界に於ける人間の位相転換、攻撃的人間觀は、
完全な空想社会主義（＝無政府主義）」なる批判について
ロシア革命以降は、世界史的にも、経済学的にも巨視的に
は、資本主義から共産主義（社会主義）への世界的過渡期で
あり、それは世界史的な規模での革命情勢といえます。これ
をもって、我々は世界革命戦争と規定してきたのではないか
のか。この革命情勢に於いては、主観的諸条件や上部構造
の、下部構造への反作用が増大するのは当然です。このこと
を、上述の如く特徴づけたのは、全く正しいのです。過渡期
世界＝世界プロ独期＝世界革命戦争と見える人々なら、この
ことは常識ですし、連合派やRGは、實際はこのことを承認
していないのです。

以上で「共産主義」十四号の「過渡期世界論」批判を終る
わけですが、連合ブンドとは、別の、しかし、基本的には同
じ手口の批判に簡単にふれておきます。

⑧ 日向翔君を批判す。

しかし、これらは、全体的には、「共産主義」十四号程、
手のこんだ批判ではないので、反批判は単純です。それは、
純正反スタ・トロツキー主義の日向君と千葉君ですが、一つ
は、日向翔君の「世界プロレタリアートなどは、スターリン
主義が発生した以上、存在しない。一向健はプロスターイニ
シエーション

⑨ 相も変わらずの反スタ・トロツキズムの千葉君を批判す
彼の小ブル自由主義・小ブル個人主義の観点からの「革命
戦争」「グリラ戦」の主張も、大分鼻息が衰えてきたよう
ですが、ともあれ、「論叢」^{16.3}で私の彼への反批判は既にや
っておるわけで、論争はもはや決着がついていると考えるわ
けですが、後、残された論点に多少言及しておきます。

彼も「世界武装プロレタリアートは、神の恩召しで、いつ
の間にか、降臨した如く叙述されている」と、小ブル反スタ
派の中傷に歩調を合わせて主張し、これに加えて「体制間矛
盾論だ、全般的危機論だ」と騒ぎまわり、「攻撃的階級斗争
の根拠は、資本と賃労働の矛盾の中から論証、展開すべきだ」
と、十年一昔前の、過渡期世界という統一観点を放棄して、
単純反帝一元論の観点に逆戻りさせ、ここで、彼のお得意の、
修正主義のローザと岩田弘の「世界資本主義論」をミックス
した手製の「世界資本主義論」なるものを展開するわけです。

彼は、毛沢東思想に憎惡の念をもって、毛沢東一中国共産
党の「継続革命路線」を「プロ独＝社会主義論」で「スタ
リン式の一国社会主義論」だと、使い古されたトロツキズム
主義の人民の武器化との結合」に概括される、プロレタリア
階級の成熟を「世界プロ降臨論」に矮少化することはできな
いのです。

「世界武装プロの成熟」や「世界史的階級關係の変化」
として表現された、「帝国主義の危機とマルクス・レーニン
主義の人民の武器化との結合」に概括される、プロレタリア
階級の成熟を「世界プロ降臨論」に矮少化することはできな
いのです。

い。これは「思い込み」（連合ブンド）、「ベーグル主義の先駆論」（八木同志）等と同じ類の、ロシア革命の世界史に占めるそれ自体の独自の意味を、忘却視する見解です。

「体制間矛盾論だ」「全般的危機論だ」という非難に関しては、中傷だとしか答えようがない。「体制間矛盾論」は全くあたらないにせよ、「全般的危機論」は、過渡期世界の特質を一面では表現している用語と考え、むげに我々は否定ばかりはしないことも附加しておきます。とにかく、「スター・リン主義と結びつけ、関連付けたら、論争は勝利し、自分は革命的で科学的だ」という具合に、単純に考えないで、何故にそれが反革命的で、非科学的なかを証明して欲しい。

なるほど、攻撃的階級斗争は、資本生産とその諸関係を基礎にして論証されるべきです。実際、私は「逆制約の能動のテーゼ」として、現代帝国主義の運動構造の中から、三プロツクの階級斗争の攻撃性、結合性を主張しています。千葉君は、我々が「世界史的階級関係の変化」を強調したことをもって、ここからストレートに、現実形態的に「世界革命戦線」の陣型が形成されると説いているように吹聴しているわけですが、これは全くデマです。我々は、現実形態論としての現代帝国主義を正しく規定する前提として、この唯物史観的領域のテーゼを定立しているのです。何故なら、現代帝国主義の特質が、正しい方法の下に正しく規定されたなら、三プロツクの革命の特質

また、岩田弘は、宇野の「流通浸透視帝」の観点にたって、「資本主義は一国経済ではなく、特定の段階の生産機軸と、農業地帯（非資本主義ウクラウンド）とが、恒常的に資本主義商品経済によって結ばれ、後者が永続的に分解されながら有機的に統一されていると、宇野派内部に新説をたて、「原理論—世界資本主義—現状分析」の岩田式三段階論を開拓するわけですが、これは、①資本主義の基礎は国民経済にあること。従って、国際的・国内的蓄積構造といえども無国籍ではないという点を否定している。②レーニンの帝国主義の不均等発展の矛盾・市場再分割の観点を失ない、③それ故に、現代帝国主義の特徴が、米帝を中心とする矛盾をもつた連合であることが見失われ、米帝を生産機軸とする单一の有機的統一性をもつた、「世界資本主義」なる超帝国主義論であるという点に於て完全に間違っている。

千葉君は、マルクス・レーニン主義を否定し、ローザと岩田に依拠し、不均等発展を無視し、マルクス蓄積論をローザ式に歪曲し、「非資本主義ウクラウドを存立条件にしてのみ、世界資本主義は成立する」とかの珍説を主張し、これでもって「世界革命の有機的統一性」が論証されたとダボるわけです。

この誤りに加えて、千葉君の世界資本主義の論理の中には、プロ国家の矛盾は全く位置づけきれず、切りすてられてしまっている。六〇年代初頭の東京社学同の「反帝一元論」が、

やその結合性、世界革命戦争とその陣型等は、簡単に論証されるわけですから、千葉君はこの関連をふまえて、「赤軍」16.4の展開をやっていることを、意識的に無視して、「世界武装プロ降臨論」を吹聴するわけです。現代帝国主義は、資本の蓄積構造・過剰資本の処理を、帝国主義が世界史的階級関係に対応して、自ら延命すべく、国際的・国内的管理通貨制を横杆にした国独資政策で、米帝を軸に国際的・国内的侵略、なし崩しファシズムの反革命として変容して、解決せんとする。この先進資本主義の蓄積構造・過剰資本の処理の中に、発展途上国との資本主義の蓄積・発達構造を組み込んでしまい、自らの再生産の下部構造とすること、等として総括されるわけですが、だからこそ、この現代帝国主義の国際的・国内的蓄積構造を通して、三プロツクの革命の特質と、世界革命戦争の不可避性・陣型が正しく論証されるのだが、残念ながら、レーニン帝国主義論を岩田弘君と共に放棄する千葉君には、現代帝国主義のゲの字も出てこないわけです。ローザは、「非資本主義ウクラウドの分解を原動力にして、資本蓄積は実現され生命力をもつ」だから、非資本主義ウクウクラウドが分解し尽したら、資本主義は生命力を失ない、自動崩壊する。この関連があるが故に、逆に帝国主義は農業・後進国の植民地化に死活をかける」と、マルクスの蓄積論を歪曲しつつ、レーニンの帝国主義論とは、全く異質の左翼日和見的な資本主義自動崩壊論を開拓したわけです。

ローザや岩田に紛糾されて登場しただけのことなのです。

確かに、中共の場合は、社会主義をプロ独まで含んだ広義の規定で使用し、他方では、厳密な意味での社会主義の段階にも、階級・階級斗争・プロレタリア独裁が存在すると主張している点で、我々を若干とまどわせるわけですが、ペダンチックな文献解釈学に沈溺するのではなく、革命的現実主義の観点にたつならば、この規定の意味は、反動的な意味合いにではなく、革命的な意味合いに受けとれるものです。この中国の「プロ独立・社会主義論」に文献解釈学的に反対し、十全大会、中国人民外交はおろか、中国プロ文革にまで反対し、「ソ連社会主義論」を否定する人々は、まさしく、対島忠行ばかりのスコラ論者であるわけです。社会主義を広義に解して、プロ独まで拡張すること自身は、レーニンもやっていることだし、問題はないわけで、「社会主義（厳密な意味での）」の下で、階級・階級斗争・プロ独が存在するのか？」とするならば、「それはどういう意味に於てか？」という点で問題が残るわけです。この点について、我々の考え方を述べておきます。

④過渡期世界の中で、権力奪取したのち、プロレタリア国家では、プロ独期を経て、生産手段を共有化する段階（ここで、生産手段の共有化は、集団所有ではなく全人民所有と規定しておこう）に到達することは、十分理論的に考察し得ることです。社会主義の最大の規定は、生産手段の共有化を指す以上、生産手段の共有化は社会主義の段階の開始を意

味すると解してよい。この点で、過渡期世界の中では社会主義に到達することはできない、とするのは論です。

(⑤) 本来、純粹理論上、規定される社会主義は、階級・階級斗争も存在せず、プロ独も必要ない社会であり、経済学上は、生産手段の共有化をもって、全ての労働は社会の下に、単一の共同労働として組織されるわけで、個別労働が直接の総労働の一部を構成している以上、商品・商品交換・価値法則・価値関係は消失している社会です。

しかし、この社会主義は実態的には、資本主義から、純粹理論的に否定的に抽象された社会であり、これは、実際的には国際帝国主義の打倒された後の、最も高い段階の（共産主義の入口の）、純粹な世界社会主義としてのみ想定される。

(⑥) 過渡期世界の生産手段（全人民）共有化後の社会も、勿論、このような社会主義の特性をもっているし、また、もたなければならぬのですが、それは、世界社会主義ほど、純粹に成熟したものではなく、不純で、低段階の特質を刻印されざるを得ない。

何故なら、国際帝国主義の包囲・競合下にあり、対外的には、プロ独を解除するわけにはいかないこと、また、そればかりか、低生産力で、賃金奴隸制（生産手段の私有と労働力の商品化に基づく、奴隸的労働による剩余労働の榨取）は消失したとはい、資本主義から生れ出たばかりであり、資本主義的社会関係が上部構造の面で残存しており、これが国際社会の如く、まだ、全面全民所有ではなく、集団所有を残している社会では、一層、このような特徴は強くならざるを得ない。

従つて、中国式の社会主义の概念規定の下では、一層「社会主義下、二つの道の階級斗争」を強調せざるを得なくなる。この点で、中共の対応は正しい。——その路線上の反米民族主義の世界革命の問題はあるにせよ。

(⑦) 我々は、このような「社会主义の下での擬制的階級・階級斗争の存在」という、特異な事態からの、概念上の混乱を避ける為に、このような低段階の不純な社会主義を、生産手段を共有化した後、高度なプロ独社会、としても間違いではないと考える。いずれにせよ、千葉君の如く、内実を理解せず、概念規定でイチャモンをつける、反スタトロツキズムを排し、中国共産党の実験的な創造的斗争の内実を理解し、これを支持してゆくことが眼目なのであり、「継続革命」と「社帝論」を支持するならば十分一致し得るのです。

(⑧) 後、反スタトロツキズムへの反撥と克服の努力のあまり、完全に毛沢東思想に溶解した花園同志や（しかし、このような行き過ぎは一定の必然性をもち、理論・路線の忠実な防衛から生れるもので、あらためるか否かの問題です。）「世界史的第三段階論」と称して、第一テーゼのみをゴジラ化して強調する、一時期の高原同志の見解など、「過渡期世界論」を発展すると称して、毛沢東思想に転向していくたり、

帝国主義の包囲と結びつき、生産力の変革（その最大は労働者・人民）、上昇と、生産関係の共産主義的変革が統一的に——つまり、世界革命の根拠地化と継続革命——推進されたとしても、なお反作用し、生産関係を把え、部分的・一時的な資本主義生産関係や、基幹的な経済的基礎をもたないとはいえ、明確な資本主義的な特質をもった擬制的階級との、擬制的階級斗争が展開されざるを得ないからである。（この擬制は、超資本主義的・超階級的な性質のものではない。）

従つて、これらの擬制的な階級・階級斗争を消滅させる意味でも、プロ独は存続されねばならない。いわんや、正しい路線が貫徹されなかつたならば、国際帝国主義の包囲と融合した残存する資本主義的社会関係は、下部構造たる生産関係を把え、局部的・一時の性質から、全社会的な国家資本主義へと、社会主義から資本主義へと内側から変質してしまうし、資本主義と階級・階級斗争が逆転、復活してしまうのです。

それが、「社会主义か、国家資本主義か」を分つ分水嶺は、世界共産主義に向けて、対外的根拠地化と対内的共産主義継続革命が、「二つの道の階級斗争」として正しく展開されているか否かになるのです。この点で、ソ連は国家資本主義へと、政治的には社会帝国主義なのです。

(⑨) 以上、過渡期世界の社会主义の下での、擬制的な階級・階級斗争やプロ独の必然性を理論的にみてきたが、中国社会

教条化したりする傾向がありますが、今は詳しく論評する必要はない。

(⑩) 「12・18路線」その後と、赤報派の残された問題点以上、第三章、第四章を通じて、「十二・十八路線」における「反スタマルクス主義批判」「一向過渡期世界論批判」なる、内容を検討し、批判してきたわけですが、それは大きく概括すれば、

(⑪) 「資本主義批判の獲得、反スタマルクス主義批判」を掲げた一定の正しい志向が含まれていたにもかかわらず、7・6以来の日和見主義、我々と日向派との間で右往左往する日和見主義の中間主義折衷主義故、その内実は、ML主義を正しく復権できず、中間的な反スタマルクス主義の域にとどまってしまい、むしろ、その「資本主義批判」に於いて、「剩余価値法則、賃金奴隸制批判」の最大の階級的党派性を投げ捨て、これを資本主義の一特質たる「労働と所有の分離」にすりかえ、これを機軸に弁証法的唯物論、史的唯物論にもわたって、ML主義を修正していること。マルクス主義の一つの新しい修正主義の志向に結果してしまつて、いたことを指摘してきた。

(⑫) 「一向過渡期世界論」の歴史的意義と内容を評価するといいつつも、この革命理論に内包されていた革命的リアリズムの立場にたつ、現代帝国主義の解明や、後期レーニンや

毛沢東思想—アジア共産主義—民族解放社会主義や根拠地化

II 連続革命を評価する観点を、左翼空論主義的に清算してしまった、「世界プロ独立」を理念主義的に強調し、「民族共産主義批判」「連邦制批判」などを空論的に主張し、反スターライツキズムの空論主義をよりゴジラ化してしまったこと。「一向過渡期世界論」はここに於いて、資本主義批判を通じて、

思想的綱領的に再構成されつつ継承発展させられることなく、逆に、その負の側面としてあった反スターライツキズムの残滓が不幸にも継承され、肥大化されてしまっていることです。

② 実践的には、「労働と所有の分離」論から導いた召換主義の組織戦術路線と、権力斗争、党としての斗争抜きの革マル主義的な、「スターライツ・反スターライツ・マルクス主義止揚」と「二派止揚、八派解体」のスローガンにみられる如き、党派解体斗争至上主義として表現され、形だけは「左」、実際は右の、「左」翼空論主義の召還主義の体系をつくり出してしまったことになります。

要は、彼等の対応は、七〇年の動きにも鮮明なように、赤軍派と革左の尻にくついて、我々の斗いを評論したり、あれこれとケチをつけて、彼等の知的俗物主義を満足させるだけの代物にすぎなかつたわけです。尙、この連合派の醜悪極まる寄生的太鼓持ち路線に影響されて、「一向過渡期世界論」への不満を、彼等の批判を借りて、跳梁し始めたのが、我八木同志等一部の清算主義の諸君だったのです。

義の路線総体を、全的に総括することはできず、大衆運動主義を無原則に賞揚し、プラグマチックに清算してゆき、この改良主義・合法主義・サークル主義的側面を多分にもつた路線を、正当化する為に、八木沢君達は、その後、レーニンの「帝国主義経済主義批判」や、「最小限斗争、民主主義斗争の強調」を拝借し、さも新発見をしたかの如く展開してゆくわけです。また、我々の問題意識を吸収しつつ、「反スターロツキズム批判—毛沢東思想の評価」等の觀点をプラグマチックに主張したりしてゆくわけです。烽火派の諸君は、関西ブンド生来の大衆運動主義と、現実主義的感覚をもつて、まがりなりにも、運動＝組織建設を継続してきているわけですが、貴君達は、7・6以来、そして、十二・十八路線の日和見主義路線を正しく総括し、現在の一足の妥当性も含んだ、プラグマチックな曖昧な、漠然たる路線を、正しく否定的に位置づけなおし、再編成してゆかない限り、いざん合法主義、改良主義、サークル主義を脱皮することはできないのです。むしろ、一定の戦斗性を七一年秋に發揮する対応を示したのは——といつても、部分的で、諸手をあげて評価する性質のものではないが——神奈川左派のグループだったようです。(彼等の戦斗的中心部が、現在爆取攻撃と対決し苦斗しています。)何故なら、彼等は、まがりなりにも、「過渡期世界論」を評価し、これと結合せんとする志向をまだ失ってはいない部分がいたからです。しかし、彼等は、赤報グル

ともあれ、このような特質をもつていた、「十二・十八路線」は、思想問題や政治＝綱領問題に切り込む性質の路線では全くなかつたが故に、七一年安保大会戦の大昂揚、頂点に於て、何ら有効に対応しきれる性質のものではなかつたのです。それ故に、この日和見路線は一年を待たずして、パンクしていくわけです。

まず、獄中では、毛沢東思想やゲバラ・カストロ路線を評価していた仏君は、持ち前の無定見と個人主義のサークル根性故に、出獄するや一転して「毛沢東思想反対」を掲げて、離脱していった。更に、榎原君や八木沢君等の対立が生じていたわけです。この対立、分裂は、全く革命的・階級的意義をもつた分裂ではなかつた。つまり、要は、彼等の日和見主義を從来通りの形態では、七〇年秋の昂揚を前に、陰蔽することができるくなつて、赤報派の如く、從来通り非武装・非戦斗の召還主義に徹する意見と、大衆斗争に接点をもつている部分を中心にして、これに反発する部分の、武斗や「革命戦争」路線を公然と放棄して、大衆運動をプラグマチックに、なり振り構わず強調する部分との対立であつたわけです。七〇年の安保大会戦の最後にして、最大の決戦期に對して、真正面から革命的に対決してゆくことをめぐって分裂したわけではなく、この決戦を如何に避けるかをめぐって形成された、情けない限りの分裂だったのです。烽火派は、十二・十八路線の修正主義、反スターロツキズムの空論主義、召換主

イープの反スターロツキズムの空論主義、修正主義経済学、召還主義路線を批判しきれず、——とりわけ、毛沢東思想に対して、断乎たる評価の立場をとることができず——党的統一性を保持できず、崩壊せざるを得なかつたのです。

仏派は、その後も鳴かず、飛ばずで、連赤敗北総括をめぐり、「一向過渡期世界論」や「連赤総括」を正しくやれず、何も学ぶことができず、我々の総括論争に介入しようとして、大火傷をしてしまい、昨年、仏君達と羽山君達、中間派等に三分解してゆく始末です。

また、日向一派も、連赤が遭遇した階級斗争の地平の前で自らの反スターロツキズム＝反スターライツ・マルクス主義に自信を失ない、革マル程の右翼反革命に徹することもできず、右往左往することによって、「五月協議会グループ」や「国際主義委員会グループ」等に四分五裂し、低迷し、結局は、自らの存在意義が、赤軍派への右翼的寄生であったことを明らかにしたのです。

恥も外聞も感じない程、非マルクス・レーニン主義に徹している叛旗派の諸君は、小ブル学生層にへばりついて、「自立社学同」の伝統の余命を保つてゐるわけですが、大衆運動感覺だけは評価するにせよ、この先、彼等は、どんな情勢が到来しようと「国家の止揚、眞の〇〇共同体の建設」とかの、共同体論を十年一日の如く唱えるだけで、大勢には少しも影響する存在ではないことは確かです。

以上の「十二・十八路線」以降について概観したわけですが、この背景の中で、赤報派のその後の動向をより詳しくみていくべきです。

④ 榎原君は、ますます召還主義に転落しており、小デューリングか、小黒寛を気取って、実践と完全に遊離した、ペダンチックな文献解釈学に耽溺している。このことは、赤報派の革左への反論の中でも明瞭にうがえます。（その反論のペダンチズムの焦点ボケ性を見よ！）川島君（革左）への批判は、小ブル民族主義の理論的表現として、史的唯物論、

資本主義批判、共産主義論が、生産関係抜きの生産力主義になつておらず、賃金奴隸としての、プロレタリアートの存在が正しく解説されてないこと、この象徴としてのマルクス主義経済学の階級的党派性を「労働の社会的生産力の増大のうちに、剩余価値の定在の因と源泉がある。」といふ、決定的なブルジョア経済学の次元の誤りを犯していることを指摘すればいいのです。榎原君は正しいマルクス経済学を獲得していないが故に、川島君を正しく批判できず、「スターリンの文獻と関連があるか、否か」「古典を修正しているか、否か」の愚劣極まる議論に陥り込んでいるのです。（この点は論叢6四参照）

⑤ 現代過渡期世界一日本資本主義の具体的・内的な分析が全くない。具体的な「革命戦争」の綱領や戦略・戦術を得しようとする志向が、召還主義故に全くない。

ではあれ、正しい見解ではない。

⑥ 「肅清を代償とする銃撃戦支持」と称して、銃撃戦支持に名を借りて、肅清を実質的には、美化・正当化してしまつて。また、この主張でもつて、自らの小ブル性——これは「資本主義批判」の強調の名の下に隠蔽され、いまは全面化されていないが、その資本主義批判そのものの間違いからして、また、具体的な過渡期世界一日本資本主義批判の欠如と、これからくる綱領・戦略の欠如、統一戦線や七〇年代革命勢力との未結合等からして不可避です。——を正当化してしまつて。七年階級斗争の具体的分析や小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への主体の立場の問題等、M-L主義の立場、方法、觀点に立つ分析がなされていない。にも拘らず、傲慢にも自らの七・六以来の日和見主義を棚に上げて、「赤軍派」「ドブレ主義」の、党建設の欠如、中央集権思想の欠如」等の事実無根のダメを吹聴してまわり、連赤以降は、私に、「調停主義だ」とか、「スターリン主義への屈服だ」とか、「転向した」とか、階級的利益を見失つたようないいことをいつことにして、言いたいほうだいの、非戦士的言辞を吐きまくつてきたが、このことにも限度があるという事を思ひ知るがよい。榎原君は、愚かにも獄中に入つて、赤報派の諸君は、赤軍派の危窮につづりこみ、私達が獄中にあることをいつことにして、言いたいほうだいの、非戦士的

(6) 空論的な「世界プロ独」や「民族共産主義批判」「連邦制批判」の言辭の継続、このことでもつて、民族解放社会主義（パレスチナ革命等も含む）や毛思想等アジア共産主義を評価せず、小ブル傲慢主義で否定する、全くの一国主義、プロ国際主義精神の喪失。

⑦ 七〇年代革命勢力の分析とその指導路線を究明せず、これらの勢力と結合すべく、前面にたつことを恐れ、烽火派批判等に名を借り、「民主主義路線」とかと称し、階級斗争から召還することを正当化する。

⑧ 「P B II Y B、R G II 政治軍隊」とかの商標を売り込んでいるが、これは、名目的には我々のグリラ路線の影響の名残りに過ぎず、實際は、サロンマルキストの、ペダンチックな売文・宣伝集団以上の域をでてないし、實際何もやってはいけない。

「軍事組織の非合法党」は、軍事一本槍のグリラ路線の反映であり、党を軍事組織に一面化し切るのは、やはり間違います。P BがY Bを直轄指揮し、党の中枢が地下化、国際化することに核心があるのであり、また、プロ人民の戦略的な正規軍化を目標に、これを特殊に促進し、独自に斗う党員で組織された軍を組織することが眼目であり、これを保持した上で、地区党や工場、地区学園の細胞は建設、維持されます。「スターリン経営細胞論批判」と称して、地区党的活動を否定するのは、自らの召還主義の正当化をめざすものではない。

初めて、反省するというような愚を犯さないようにし給え。

⑨ 赤報派の諸君は「革命戦争派の中で現在の地位を築いた」と自己宣伝し、自分が「革命戦争派」で「しかるべき地位を築いた」と思つてゐるらしいが、一体誰が認めるであろうか？！ 一体、君達は何を斗つてきたのか？！ 人民に対してどんな利益や教訓を献じたのか？！ 君達の行為で、衆目一致して認めるであろうことは、連赤敗北後の我々や革左の窮状につづりこんで、データラメな言動を、「党派斗争」と称して吹聴し、赤軍派と革左（神）の両組織の特別寄生評論家集団たる役割を果してきただけのことではないか！

「革命戦争派」として認めてもらいたいのなら、また、ひとかどの指導力を發揮することを望むなら、まず、何よりも貴君達は、尊敬すべき戦役を展開すべきです。その資格を獲得しない以前には、大口をたたかず、少しは謙虚に、節度をもつて発言すべきです。

第一節 八木同志等豚小屋パンフ」「臨総パンフ」の全

面批判を開始するにあたって、キの黒い「臨総パンフ」を批判す

赤軍キヤンペーン、赤軍派破壊活動を、主に連合ブンド十二

・十八路線と赤報派（或いは烽火派）の批判というかたちで反批判し、一掃してきたわけですが、次に、同盟内の八木同

志等、清算主義のメンシェヴィキのグループを八木同志等、清算主義の面々が、自己の腐敗と日和見主義の心象を慰撫し、一時の安らぎを得るために、日々礼拝している、メンシェヴィ

キの大殿堂たる臨総パンフを中心にして、批判してゆくことにします。我々が、この清算主義批判に劈頭（ヘキトウ）から臨まなかつた理由は、この豚小屋パンフ「臨総パンフ」が、これまで検討してきた、ありと全ゆる反赤軍派の全ての傾向、論理、論点、思想性、心情、批判の方法等を集成した——部分的には、八木同志によつて、より適当に調合され、

よりその臭氣の威力が強められている——反赤軍派の、赤軍派破壊の大殿堂たる性質をもつてること、従つて、このパンフの背景、地盤を、まず批判的につき出し、紛糾し、清算主義の糧道を断つておく必要があつたこと、また、陰や陽の、直接・間接の、清算主義の「左」右の援軍を、殲滅しておく必要があつたからです。また、副次的には、メンシェヴィキの筆頭の八木君を始めとする諸君が、これといつて階級斗争に貢献する何程かの創造力を持つてゐたわけではなく、日和見主義者達の、数々の日和見主義の理論、路線のツギハギをやつてゐるにすぎないこと——しかも、多分に「赤軍派の敵は、自分達の味方」の如き、「友敵論」を援用しつつだ——創造力の貧困を、他党派のおこなつてゐる赤軍派批判をツギ

れています。

我々は、これ程の執念をもつて、共に斗つてきた同志に、罵詈（バリ）雜言の限りを尽す能力に驚嘆を禁じ得ないくらいです。しかし、真剣に殺された同志とプロ人民に、誠心誠意自己批判せんとする我々の態度につけ込み、「今は、どんな無理難題をいつても承認する」と浅はかに考へ、自らの自己批判を棚に上げて、傲慢の限りを尽すことができた時期は終りつつあることを君達は思い知るがいい。もともとからしても、君達が、我々に何かの優越感を感じる理由など、何一つ持ち合わせてないのでありますから。

この臨総パンフの大毒草たるゆえん故に、この豚小屋臭氣と汚物へまきまし、これまでその中に入り込むことをせず、外側から、我々の同志達は、日和見主義と決めて、これに「革命戦争それは、往々にして小ル革命戦争であつた）を対置し、こと足れりとした、余り説得力のない不十分な——それ自体は正しいのだが——対応しかしきれなかつたのも、あながち無理もない話なのです。しかし、我々は、このような対応に甘んずるわけにはいかない。しばし、同志諸君は、一大奮氣し、臭氣をこらえ、豚小屋内部招待に、勇躍してついてきて欲しいと考えます。

この豚小屋攻略を開始する前に、同志諸君に、我々の清算派（メンシェヴィキや党再建）党建設に向けての党内斗争に対する態度を明らかにしておきます。

ハギした、ボロ旗でおおい隠していることを確認しておきたかつたからです。

これには、これまで赤軍派と対抗関係にあつた、連合ブンド諸派や日向、叛旗グループですら、否、権力ですら涙を流して感激する程の代物であつたことを確認しておきたかったのです。八木同志は、この点に於て、権力や連合ブンド諸派から、赤軍派批判の集大成たる百科事典をつくつたという点で——さすがの彼らも、これ程には、徹底し、しかも鮮明には、我々に敬意を払つていたが故に、右翼反動には徹しきれず、やりきれなかつた——功労者として表賞されるに足るわけです。

とまれ、我々は、かかる前段工作は一応やり遂げたので、いよいよ、同志、斗う労働者人民から強い要請を受けてきた、清算派（メンシェヴィキ）の批判、「臨総パンフ」批判に入ります。

この豚小屋パンフを批判するには、それ相当の覚悟と力量がいります。というのは、この豚小屋に入つて、その内部構造を調査し、解体しようとするに際して、余りにも強烈な悪臭、腐臭ふんぶんで、窒息させられそうになり、下手をすれば足をとられて、糞まみれになつてはい出すことすらできず、遭難してしまふくらいの、メンシェヴィキの日和見主義の魔力がたちこめているからです。同志八木のこれまでの半生をかけた、日和見主義のウン蓄が、執念をこめて、たたき込まれます。

① 我々は、清算派が自らの清算主義のメンシェヴィズムを自己批判し、清算しない限り、二回大会以降も同志と呼び合ひ、共に協力し合つてゆけるわけがないと考へる。この点で、現在知る限りの清算主義には、我々は何の幻想も持つてない。従つて、我々は、小ブル革命主義の教条主義（小ブル革命戦争の左翼反対派）の諸傾向が、ほぼ克服されつつある現在にあつては、最大の党再建の斗いの要は、清算主義のメンシェヴィズムの克服におくべきである。我々は、これまで責任をもつてきましたし、今後も我々流に必要に応じた責任をとるつもりですが、清算主義の指導的同志達は、自らの犯した誤りの種類や、党におよぼした損害の程度に応じて、それ相当の自己批判と処分を受けねばならないでしょう。我々は、君達が必要な自己批判を行なならば、心から、今一度同志として迎えるでしょう。また、清算主義の路線に従つた、かつても、今も、これからも同志である下部同志達は、その事情を自己批判的に誠心誠意説明することを要求する。最早、革命に意欲を失い、斗志を失つた人々には、我々は誠心誠意離党を勧告する。

我々の党再建の義務は「プロレタリア人民の利益のみ、革命のみに妥協する」という原則に立つて、一切の法理を捨て、清算主義批判に全力をあげることが義務であると考える。これこそが、現在、清算主義のメンシェヴィズムに侵されている同志達への眞の連帯だと考える。

(回) 我々は、しかし、清算派の人々を、なお現在同志の呼称をつけて呼ぶ。それは、清算主義の路線に一抹の敬意を払つてゐるが故ではない。また、組織的慣習故でもない。(この意味では、旧P.B.や「臨時CC」がその内実を備えているとは、全く考へられない。)

主要な理由は、我々が未だ完全には、彼等同志の可能性の有無を最終的に確立する、諸条件や資料をもち得てないという、消極的な理由によるものです。

今一つは、我々には安易に訛別したりしてはならない——子供っぽい、学生運動の諸サークルの如き——それ相当の重い歴史があり、使命があるからです。分裂を喜ぶのは、——といつても、要是清算主義の党からの放逐以上の事柄を意味しないし、大げさに分裂という程のことでもないのだが——他でもない、資本家共と國際帝国主義者達であり、プロ人民はなるだけなら、赤軍派が革命的力量を發揮し、その熱い革命的感化力によつて、清算主義を溶解してしまい、ガラだけ吐き出してしまつ、六九年七・六を完璧に乗り越える方途を望んでいることを、よくわきまえてゐるからです。それに清算派の問題とは別に、党再建の複雑な行程の中で、「中央委」に結集していかざるを得なかつた同志達もいることですし、また、我々は、党再建の過程、最早革命に意欲を失い、斗う氣力を衰弱させてしまつてゐる人々には、組織にとどまつて腐敗、堕落してゆくよりはよいと考え、誠心誠意離党を勧告

と共に斗つてき、しかも今後も斗おうとしている革命的勢力に敵対し、破壊活動を続けることになるからなのです。

第二節 小ブルメンシェヴィズムの立場・方法・観点の全體像を暴く。

① メンシェヴィズムを全面的に分析・批判する必要があること。

清算派との論点は、全面的で多岐にわたります。我々は、全面的に全ゆる方面で、清算主義の日和見主義を完全に一掃してゆかなければならぬわけですが、その為には、清算主義の全構造を全面的に対象化し、その全関連を明らかにし、それに対する批判の基本的立場・方法・觀点を鮮明にして、この機軸のもとに細部の論点も全批判体系の一環として適確に批判してゆく対応をとるべきです。清算主義の全面的な批判・分析ができる、最早この本章の課題は、九割方、実現されていったようなものです。

清算主義のメンシェヴィズムは、もともと連赤敗北が露呈される以前から、同盟内に既に発生し始めていたわけですが、これが一定の力を得たのは、何はさておいても、連赤—「新党」の敗北を契機にしての、その後からです。いわば、清算主義のメンシェヴィキの立場、方法、觀点をもつて、連赤敗北を総括することによつて、それまで潜在していたメンシェヴィキ勢力を浮上させ、統合せんとしたわけです。といつて

し、一番害悪を流すことが少ないように出分することが必要と考えています。従つて、清算派の同志達は、我々のこのような態度をもつて、また、これまで、最大限、次元の低い批判は避けてきたことをもつて、我々が君達の黒い路線に同調していなどと、或いは、批判できなかつたなどと見当違ひをして、優越感にひたらないで欲しい。また、我々は、君達が最後でも悔い改めない場合、君達の断乎たる組織からの放逐を、何のちゅうちよもなく行う覺悟があることも理解しておいて欲しい。以上を踏まえた上で、我々の批判に真剣に対処して欲しい。骨のある水準の高い、革命的情熱のあふれた反論を期待するものです。間違つても、先進的労働者人民にひんしゅくを買ひような、口先だけの対応はしないで欲しい。君達は、既に赤軍派の基礎あげた評判を地に陥りしめてしまつた。だが、これは、仮りに内輪の問題として一步譲つて見過ぎとしても、許されないのは、六九年以來、堂々として確かれてきた革命的勢力の斗いに唾を吐きかけ、侮辱し、この成果を台なしにする、革命的利益を損なう行為をしてきたこと、これはなんとしても償わなければならない性質のものですが、その償いもせず、その反対に、我々の論争の中で、一時の感情や論理のおもむくままに走り、害毒をまき散らすなら、取り返しのつかない事態が生れる事、君達は、烽火派や怒濤派の水準に、そのまま何の曲折や風波も経ないのでとどまつておれると思つたら、全く甘いのです。君達は、我々

も、いまだ同盟總体から考へれば、極く極く少數派にすぎず、連赤敗北後のドサクサにまぎれて、清算主義の路線やでたらめの臨時總会をデッチ上げただけのことであり、革命的諸同志の大半が獄中や国外にあつたこと等を条件にしてゐるにすぎず、彼等がのさばるのも時間の問題なのですが、従つて、我々は、清算主義の全構造を体系的に解説してゆこうとするならば、その機軸に、彼等の連赤敗北の總括の基本觀点を抽出、分析することをすえねばなりません。

② 「小ブル性の克服」を觀念論の絶対論でとりあつかうまやかし。

清算派の總括の觀点は、連赤敗北におけるその思想面の「小ブル性」を、無媒介に、觀念論的、特殊に歴史的階級斗争と路線の関連、關係から切り離してとり出して、「小ブル性の弱点が少しでもあれば、必ず連赤—新党敗北の如く同志殺しになる」と、共産主義化=肅清を、小ブル的恐怖をもつて、右翼的に否定し、「小ブル性が残つてゐる限り、武斗はやるべきでない」と主張し、資本家共や権力の「武斗をやれば必ずある」という論理と、同一基調の主張を展開することです。つまり、「何故に、主体の小ブル的要素があのような共産主義化=肅清に發展していったのか」を、具体的な七年階級斗争を中心にして、客観的条件・主観的条件の分析の中で、史的唯物論と弁証法的唯物論に従つて、科学的に解明するのではなくて、一切の媒介抜きに、その小ブル

性を、「赤軍派」をはじめとする諸個人の資質の問題として、

観念論的・形而上のとおり出してしまったのです。この限りでは、清算主義と、森君達連赤指導部は、「左右の相違はあれ、小ブル性・思想性・倫理性・組織性・作風等を、一定の天賦の問題として、決定論的・宿命論的に抱える志向の点で同質なわけです。

このように、小ブル性を觀念論的・形而上学的に抱えるが故に、小ブル性は絶対的範疇に昂められて抽象化されてしまい、「小ブル性の克服」は、觀念論の絶対論として問題とされ、唯物論の相対論として取り扱われなくなつてくるわけです。

このような、「觀念論の絶対論」の見地にたつ、「小ブル性の克服」のまやかしの論理は、小ブル性の克服は常に相對的な課題でしかない以上、武斗は永遠のかなたにおしやられてゆくわけです。また、前衛党建設にとって不可欠の鉄の規律の志向は、「鞭の規律」の悪例を強調して、完全に無視されてしまうのです。ここから、資本と権力の論理たる「武斗をやれば必ずあある」と同一基調をつくり出してしまう。

また、連赤敗北を契機にして、革命的同志の内省的な自己批判の姿勢につけこんで、戦斗的・革命的同志達の誠心誠意の自己批判を悪用し、種々な種類の、また種々な程度の「小ブル性」に對して、その克服を「絶対的克服課題」として要求し、この告発をバネにして赤軍派のこれまでの実践と理論を、全面的に清算してゆくよう「命令」するわけです。まさ

に、精神界の法王としてだ。八木同志は、思想界に君臨する唯一絶対者であるわけなのだ。

このような「小ブル性の克服」をめぐる、連赤総括に關しての思想問題、思想斗争に対する、代表的な意見を検討してみると、例えば、千葉君などは實質上、連赤一「新党」指導部の觀念論の絶対論に基づく、「小ブル性が克服されない限り、武斗は開始できない→従つて、『小ブル性』を所有する同志は肅清すると倒錯して、プロレタリア革命派の同志を殺した」対応を、事実上容認して、他方では、八木君等は、「小ブル性が払拭されない以上、武斗はやるべきでない」という、同じく觀念論の絶対論の觀点にたつて、赤軍派の理論と実践を清算していっていること、これら二つの意見対応は、「左」右の相違はあれ、同じ次元の対応です。革左（神）の対応はどうか。彼等は、「共産主義化＝肅清」の本質的性格を見破れず、「社会主義革命派の反米愛国派への内ゲバを正当化する『ペテンの論理』」としてのみ抱えることによつて、この「小ブル性の克服」の觀念論の絶対主義の見地を許容してしまつてゐること、このことは、「論叢」No.4で証明したつもりです。なお、三者はいずれも「共産主義化運動」が、階級斗争の転換に見合つて、主体の側の路線転換の疎外化形態であるという、本質と疎外形態の関連がしつかりと把みきれず、殺された同志達を侮辱してしまつわけです。

抽象的な「小ブル性一般」を、連赤敗北の「因」とすること

によって、具体状況の具体的分析に基づく小ブル性の分析がないが故に、彼等にとっては、小ブル性と名のつくものは、一切が恐怖の対象となる、このような奇妙な精神構造は、単に彼等の觀念上に於ける誤りによるものだけではない。まさに、彼等が、連赤敗北の恐怖におびえきつてしまい、冷静にマルクス・レーニン主義の觀点で事態を分析できず、あわてふためき、また、連赤敗北以前に口先だけの革命戦争をガナリ立てていた裏側で、腐敗と堕落、裏切りの日和見路線が醸成されていたことに根拠をおくのです。「身をけずりながら斗つたのに、何の報いもなかつた」（「序章」の八木同志の言）といふ、小ブル自由主義インテリの「挫折」感をふりまき、周囲の革命的部分を意気阻喪させ、一切の責任を「『赤軍派』の資質」に求めつつ、「赤軍派の政治生命は終つた」「赤軍派は解散すべき」赤軍派を連赤敗北とともに埋葬する「七・六を契機とする赤軍」といつた、あきれ返り、革命的同志を呆然自失させるような、度し難い裏切りをおこなつた。これは、保険後の逃亡といふ

「裏切りの展望」の上に、まさに權力に首根っこをバッヂリおさえ込まれる中で提起されいつたといふ、舞台裏の事情も我々はしつかり踏まえておく必要がある。

③ 小ブル思想主義と講壇マルクス主義とその背景。

八木同志等、清算主義者の觀念論の絶対論としての「小ブル性の克服」の方向は、特徴的には、小ブル自由主義インテリゲンチャに特徴的な方向です。

これらインテリゲンチャは、生産的労働、階級的実践、科学的実験の現場から遊離した、浮遊的な存在であり、主要には、觀念的な精神労働が主要な活動形態であること、それ故に、思想を、弁証法的唯物論、史的唯物論に基盤をおく、唯物論の反映論（能動的）としての認識・綱領・組織・戦術の總体に於て具体的に把え、また、階級・階級斗争の反映として把えるのではなく、神秘的な決定論的天賦の存在として、超階級的に絶対化して把えること、思想を觀念論的に絶対化して把え、「思想」万能主義の作用が習性化しており、我々はこれを小ブルインテリの小ブル思想主義とも命名できる。

現代においては、思想とは「マルクス主義」であるが故に、このような連中はマルクス主義に傾倒するわけだが、彼等は実践がないが故に、マルクス主義の活学活用がなし得ず、マルクス主義が実践と切り離せなく、階級性（イデオロギー）と科学性（認識、認識方法）との統一であるにもかかわらず、これをイデオロギー主義的に一面化して把え、ML主義を経典化し、文献解釈学に熱中し、その片言隻語の覚え込みに熱中し、マルクス主義を講談にかえてしまつわけです。つまり、小ブル思想主義は、マルクス主義の思想の分野では講壇マルクス主義としてあらわれ、かつ、小ブル自由主義インテリと、

— 39 —

講談マルクス主義とは好一対なわけです。この小ブル思想主義の典型に、吉本の「自立論」や黒田の「プロレタリア的人間の論理」等の形而上学があるわけですが、八木同志はサルトル、吉本の「自立論」—日共的講壇マルクス主義を身につけ、今や、その思想的榮位を「部落解放」「在日アジア人問題」にまで発展させ、我が日本の思想界の法王として君臨せんとしているわけです。

「小ブル性の克服」の觀念論の絶対論としての提出たる、小ブル思想主義は、小ブル性を唯物論的に相対的に把えないが故に、逆に、これを敵・味方を越えて絶対論の次元で展開するが故に、敵対矛盾と人民内部の矛盾の区別がつかなくなり、人民内部の矛盾や、斗う主体の相対的弱点を絶対化して、敵対矛盾化して把え、その帰結として否認してゆくが故に、全て清算的に否定されてゆくわけです。連赤総括の否定面での基準を、觀念論の絶対論の見地に立つて、「小ブル性の克服」においては、当然にもこの克服の絶対的基準が捻出されざるを得ない。故に、まさにその対象として、講談マルクス主義が導入されわがで、まさにその対象として、講談マルクス主義が導入されてくるわけです。最初は、これはもつと矮少化されて、「レーニンの學習ができたなかつた」「レーニン主義のねまわしがなかつた」（「再生に向けて」¹⁶⁻⁴）などのたわけた主張としてあつたのだが。

このような総括方法の前提には、我々が小ブル性に對して、或いは「非マルクス主義性」に對して、これを前進的、継承的

的、軍事的天才、卓越した行政家としてたち現われるわけです。ちょうど思想界で八木同志が法王的地位を獲得したように、この方面でも空前絶後の大天才を發揮するわけです。彼等は、大天才を大いに發揮して、我々の歴史に對して、罵詈雜音の限りを尽すわけです。いわく、「ロマン主義」「急進民主主義」「急進的コスセボリタニズム」「小ブル民族主義」と「他民族利用主義」「肉化主義」「単純な権力斗争主義」「プロレタリアから独立した権力斗争」「権力問題を軍事問題に直接実態化してゆく」「觀念論の半無政府主義」「大言壯語はあっても徹底したアリズムはない」「戦斗的氣分に拝跪する」「軍事力学主義、戦術左翼、類型主義、形態主義」「自然成長論と主觀主義の理論的基礎」「ベトナム解放軍の日本分遣隊としての一握りのゲリラ」の否定、「あるべき理念や自己の気分や願望に基づき、頭の中でねりあげられた計画の実現の方法」「小ブル的浮動性」「斗争形態の世界的拡大過程として、世界階級斗争の發展として考へる（？）世界革命戦争の否定」「ゲリラ戦だけをとり出して、ゲリラ戦の自立的發展を抽象的に展望し、アレコレ思いつく」「軍事力学と冒險主義」「時期尚早の主觀的願望のみの軍事的熱中」「小ブルジョア的主体性論」「黒ヘル戦士達の斗争を浮浪人的軍事行動」と罵倒すること」「世界單一同時革命」の否定、或いは「サークル主義」「戦斗団主義」「一つの傾向

否定として對するのに對して、彼等は逃亡的、清算的否定として對することにも現われる如く、我々も彼等も「小ブル性」や「非マルクス主義性」をともに問題にしていよいよですが、同じスタートラインに立つても、我々はこれを克服し、更に前進してゆく為の課題として把えるのに対しても、彼等はこの課題の重さに驚き恐れて、合法主義の日和見主義に逃亡してゆく為のバネにする点で、スタートの方向は百八十度違う根本的に相違があるわけです。

以上の如き、清算主義の觀念論の絶対論の立場に立つ、「小ブル性の克服」「赤軍派の小ブル性に問題があつた。自分は関係ない。プロレタリアの資質が問題であつただけだ。」といふような、連赤、「新党」敗北を主体的に受けとめていくようなどをとりつつ、實際は無責任極まる責任転嫁の日和見主義の立場、そして、人民内部の矛盾や斗う主体の弱点の相対性を絶対化し、敵対矛盾化したり、小ブル性を清算的、逃亡的否定して取り扱つたり、部分的な非マルクス主義を講談マルクス主義の觀点から、同じく清算的否定する方法から、次のような到錯した、驚くべき右翼日和見主義の種々な觀点が導かれてくるわけです。

④ 清算主義の清算の手口とその觀点。

まず、赤軍派の実践上の総括に關しては以下です。

八木同志等清算主義者は、ここでもマルクス・エンゲルス・レーニンを上まわる、古今東西に類をみない、偉大な政治

を反映する戦術左翼」etc. このように、赤軍派の急進性、革命性、「階級性」、根本的な長所たる、階級的ラディカルズムとプロレタリア独裁の精神、プロレタリア國際主義の精神、権力斗争の遂行、武斗の開発、戦術の創造と駆使能力、世界同時革命・世界革命戦争、想像的展開性等は、全て憎しみを込めて、その弱点、欠陥を絶対化することによつて、相対的には、革命性・階級性を有し、明らかにプロレタリア人民の斗争であることが忘れ去られ、清算的に否定されてゆくわけです。或いは、新左翼運動の、主として学生運動の意義の、つまり、「先駆性論」や「擬似前衛論」の清算的否定、これらのマルクス・レーニン主義の根本的核心を全て放棄するわけですから、後には何も残らないが故に、ほとんど革マルの「武装蜂起主義」と同じ類の反動へと墮落するのは必然であるわけです。

そして、これらの「根本的誤り」を、「赤軍」¹⁶⁻⁴を始めとする赤軍派の理論・路線の結果、帰結として、恣意的にきれいに整合させて説明してゆくわけです。

7・6の歴史的必然性と相対的正しさの否定と、「下部につきあげられなかつたら、関西に帰るつもりだつた」という、指導者にあるまじき言動、大元帥の立場に立つて、六九年斗争を「大言壯語はあっても、アリズムはなかつた」「政治過程論的指導」等と能書きをたれて、六九年當時の客観的、主觀的条

件を考慮に入れて、唯物弁証法的総括方法の否定、國際根拠地路線やH.J.斗争、「他民族利用主義」の「小ブル民族主義」として唾をはきかけ、練続M作戦の意義など何一つ述べず、完全否定で無視しきり、6・17斗争すら否認してゆくわけです。黒ヘル戦士達の七一年秋の爆弾斗争は、「浮浪人的軍事行動“ときめつけられていく”わけです。

このような恣意的、観念論的総括故に、連赤―「新党」敗北としての「共産主義化」―肅清と銃撃戦は、階級斗争の新段階に照応する、路線転換―赤軍派の飛躍の疎外化形態、及びその部分的克服形態と、正しく把えられるわけがなく、七一年秋の過程のみは、「八木同志の浮動が極限化し、赤軍派から逃亡し、」M.L.主義者「になる過程」（「序章」誌）――実際は、裏切りの清算主義の逃亡主義として、保釈出獄後連赤の戦線に参画することを決断できず、レーニン研や連合ブランドに媚態を呈し始めたこと――であつたが故に、それをいかにしても革命的とは強弁できないが故に、この部分だけは空白にされており、自らの小ブル稳健主義とそのメンツェヴィズムへの転化が隠蔽されてゆくわけです。

また、「殺された同志達の復讐」を、彼等も復讐せんとするポーズはとるわけだが、いかんせん、彼等が七一年秋の第

三次綱領論争―党内斗争に於て、右派―メンシェヴィズムの位置に立ち、殺された同志達と対立関係に立っており、また、彼等は内心では、連赤―「新党」の全ての同志達を小ブル革

命主義の反動化した、無政府主義のエスエル戦斗団化した部分として否定しているが故に、「指導部と下部同盟員の党内斗争」（臨総パンフ）と言いつつも、一切その内容に関しては語ろうとしないわけです。この事情も、七一年秋の空白化の意図と同じ意図から生れています。ところで、八木同志等清算主義者が、このように、超越者的絶対者としての思想家・政治家・軍事家・行政家としてあるまゐるのはどういうわけだろうか？ 答は簡単です。一つは、彼等が二、四年前の事態を恣意的に、当時の歴史的条件を無視して、「その諸条件の中で、矛盾がどのように発生するのか」の矛盾の段階性、矛盾のラセン性、量から質、質から量、否定の否定、等の弁証法や矛盾論を駆使して、階級斗争の展開と主体の対応の全関連を、科学的に解明しようとするのではなく、「ああすればよかつた」式の結果解釈の観念論の形而上学に依拠していること。今一つは、彼等の「偉大な天才たるボーザ」のゆえんは、「レーニン」の用語を訓古学よろしく覚え込み、もち出して、レーニン主義の真髓を骨抜きにして、それを、若干は脚色したりしつつ、殺し文句として多用することにあります。彼等の日頃の言行不一致を知らない人は、それが故だまされてしまうわけです。

いわく、「自己の中途半端な気分と心情の浮動」「組織的無政府性」「厳格な組織」「厳格さ、首尾一貫性」「思想的厳密さ」「頑強さ」「堅忍不拔の党」「急進的コスマボリタ

ニズム」「ロマン主義」「急進民主主義」「小ブル民族主義」「単純な権力斗争」「主義」「……とくら見地に立つ」「全斗争を伝統的に組織し、統率し、首尾一貫した見地と活動を確保し得す」、「……を打鍛えてゆく」「一切のあらわれを統率してゆく」「プロレタリアの独立性、党的政治的独立性」「正規の攻囲軍」「諸個人の觀点、諸個人の思想……」「現にある運動の傾向性の代表者……」「絶えざる動搖とグラッキ……」等々。何故に、このように講壇風にしか語れないのか？ 何故に、生き生きとして、情熱をこめて、人々を奮いたたせるように書けず、人々をして灰色の氣分にのみ陥らせてゆくのか！？ とりわけ、八木同志は、武斗を抑圧する方策を開発した点で、いま一つ注目されます。つまり、自らの思想や路線の不在故、空洞性故なのだが、マルクスやレーニンの權威に頼つて、具体的状況の具体的分析として提出するのではなく、マルクスが武斗一般を必ずしも共産主義運動とは把えなかつたこと、レーニンの「エスエル批判」や「左翼小児病」を悪用し、「人民から独立した武斗」「軍事実態論だ」「ロマン主義だ」「エスエル戦斗団だ」等とガナリ、

日共が新左翼に對したのと同じ手口で、武斗を否定してゆくわけです。最近は、日共と寸分たがはず「挑発者だ」とくら言動を發してくるらしいが、こうすると、完全に日共である。我々は、マルクスやレーニンの教義を忠実に守つてゆくことを第一にするし、マルクスレーニンの文献の研究と活字活用を第一とするが、これはまさに活字活

用であつて、如何なる主体が、如何なる目的に向か、如何なる条件で活用するかを不問に付して、マルクス・レーニン主義を、教条主義的、講壇的にしたり、利用したりはしない。八木同志等清算主義者は、まさにマルクスやレーニンの文言を利用し、その權威に頼つて――自分の革命觀や「權威」では、その正体がすぐあはかれるから――革命的、戦斗的同志達を変質させようとするわけだ。また、「都委員会」を名乗つていた清算主義者達は、一九〇五年のブレハーノフの有名な「武器をとるべきでなかった」を擁護しつつ、「六九年は決起すべきでなかった」とガナリたて、「赤軍派の發生そのものが間違いであつた」「客観的諸条件を飛び越えた、主觀的斗争」（「再生に向けて」16.5）「軍事力学主義」（同掲書）「馬鹿から白痴にいたる過程」（「再生に向けて」16.4）と、自分の言動がどんな意味をもち、どんな役割を果していけるかすらわからず、ワメキたてたのであつた。

⑤ 「過渡期世界論」を「批判」することによつて、修正主義に転落していくこと。

以上の如き、実践面での反革命的な清算的否定は、以下の如き理論面でも、同様の「小ブル性」「非マルクス主義性」のレッテル貼りと、観念論の絶対論による、敵対矛盾規定化・マヤカシの方針によつて、同様に貫徹される。

この、理論面での逃亡的、清算的否定は、赤軍派の立脚点の一つであり、一向過渡期世界論の重要な一結節点たる「赤

軍」¹⁶に向けられるわけですが、（彼等は、この文章が、赤軍派の一つの結集点であったとはいえ、主要には、「ゲバラ」「カストロ路線と我々」「我々の立脚すべき地点」¹⁸、「現代革命I、II、III」「赤軍」¹⁶等の、有機的部であり、それ故、筆者は全てを全面展開し切つたり、「我々の立脚すべき地点」のように——していざ、尙、部分的であることを自認していること。また、内ゲバのさなか、非合法の中で、四～五日間で、必要な資料や文献もなく、書きあがた、五年前の文章であることを、それ故に歴史的必然として、一定の弱点や不十分性、未熟性が伴なわざるを得ないこと等を彼等は念頭におこうともしてない。といつても、五年前の文章が今でも批判の対象にあげられ続けていることは、我々にとっては大いに光榮なわけですが）この批判の立場、方法、観点は、我々がこれまで検討、批判してきた八木同志によつて、相当脚色され、かえらわれてゐる部分もあるが、連合ブンドの「過渡期世界論批判」と同じであり、彼等が、「共産主義」^{14・15}号から剽窃してきたことは明白なわけです。

清算派は、「赤軍」¹⁶の弱点たる部分的な小ブル性、非マルクス主義性を——相対的にはプロレタリア的でマルクス主義的なだが——資本主義批判の深化——毛沢東思想等アジア共産主義の正しい評価——党组织問題——党建設の正しい獲得等を主要方面にして、これを克服し、過渡期世界論を再構成

世界の史的唯物論による把握の立場、方法、観点を見失つてゐること、この点で「法則主義を修正する革マルや連合ブンドと、手をあいたずさえてゐるのです。
第二は、「資本主義批判を軸にして、対象を媒介に——その批判・分析を通して——しての、科学的社会主義を科学的に証明する方法がとられず」として、得意になつて非マルクス主義だと吹聴してまわつてゐるが、確かに、価値論・剩余価値論・蓄積論の展開が不十分であるという欠陥はあるが、プロレタリアの対象たる資本の分析・批判を媒介にして、プロレタリア共産主義革命の必然性を解明する見地にたつてゐること、従つて、この批判はデータラメである。

問題だったのは、過渡期世界は、非資本主義や、特殊なプロダクト社会や社会帝国主義革命の必然性を解明する見地にたつてゐること、従つて、この批判はデータラメである。
主義批判の前提たる、弁証法的唯物論や史的唯物論の解明も体得がない限り不可能であること、それ故に、三層分析の方針を一元的、統一的に把えようとするならば、今一度、資本主義批判の端緒に立つたのです。つまり、史的唯物論（の次元の世界武装プロレタリアート）の第一テーマ、現代帝国主義を軸とする三プロックの階級斗争の逆制約の能動的テーマとしての現実形態的規定、第三テーマとしての現状分析として、三層分析の方針をもつてのみ、過渡期世界は把握できるのです。過渡期世界は、狭い資本主義批判一本槍の、資本主義一元論の経済決

しつつ、継承、防衛、発展させる立場にたつことができます、逆に、この弱点をことさら致命的弱点と誇張し、過渡期世界論のもつ、歴史的なプロレタリア的マルクス主義的な特質、意義を、全て否定して投げ捨て去ることによつて、逆に批判者そのものをして、日共、革マル等修正主義者の側に迫りやつてゆくわけです。

第一は、「『赤軍』¹⁶は、階級斗争を史的唯物論として、原理的に体系化、哲学化しようとした観念論であり、プロレタリアートの組織形態、斗争形態、イデオロギー形態が、何か一つの原理に沿つて自主的に発展するかの如き、主張をしている」等として、黒田や連合派のスターリン批判に於ける「逆行アーティストの法則主義——法則適用論」という、不可知論の、法則不在、否定論に屈服し、史的唯物論としての、歴史の法則的展開を否定していること。マルクス・レーニン主義から「法則の科学的解説」の精神をとつたならば、一体何が残るだろうか。また、八木同志は自己の、当時の藤本進治の哲学からの未解放状態を棚にあげて、それを私にまで拡張して——私は、当時、藤本進治の克服視点は十分保持していた。「赤軍」¹⁶の第四章こそ完全な藤本の哲学ではないか！——「革命の哲学」に屈服した「主体的唯物論の一形態」だという、的はずれの批判をしてゐるが、これは君自身の問題ではないのか！ いざれにせよ、清算派は、マルクス主義の史的唯物論の基本的立場、方法、観点を投げ捨て、過渡期の論を清算してしまう陰謀である。

第三は、過渡期世界論の最大の核心たる、プロレタリア国際主義の思想、プロレタリアートの国際性、世界武装プロレタリアートのテーマに對して、死に者狂いの、愚にもつかない、いくつかの論理をこねまわして、急進的コスモポリタニズムという悪罵を投げつけ、これを否定して、結局は一国主義と先進国革命の主体的位置認識を欠落させた、民族解放、社会主義——最前線論と、毛沢東思想等アジア共産主義への溶解に終つてゐること。しかも、最初は、「民族共産主義」とかと、アジア共産主義を非難し、中国人民外交を批判し、連合ブンド等と同じ反スターロツキズムの立場に立つてゐたこと、我々の批判にあって、やつとこれを徹回したかと思えば、だ。

第四は、「『労働力適品』とプロレタリアを規定する」これは、——つまり、これは資本の一部であることも意味するので——正しいにもかかわらず、「労働と所有の分離」に資

本主義批判の核心を据える、榎原修正主義経済学にいかれてしまって、しかも、私は「労働力商品所有者」などというブルジョア用語は使用してないにもかかわらず——使っているのは八木同志だ！——これをもって、ブルジョアアイデオロギーに侵されていると、あらぬ誹謗を行なっている。

第五は、「プロレタリアの世界性が生来的に、自然属性的に備わっているといふのは誤り」と、異常に強調し、資本主義の原則的批判からしても、また、現代帝国主義の国際的、国内的蓄積構造と國際プロレタリアートの成熟との統一としての過渡期世界の特質からしても、その命題の正しさがますます証明されつつあるにもかかわらず、このように解明することができず、これを否定して、急進的コスモポリタニズムという悪罵を投げかけ、自らは一国主義に転げ込んでいている。

第六は、「階級斗争の発展に、原理や法則があるわけではない」「階級斗争の世界史的段階を指定するのは誤り」「これはヘーゲル主義だ」とか矮少化して、唯物史観の次元での世界武装プロレタリアートのテーゼ、方法と觀点を否定し、逆制的の能動のテーゼは、「武装プロレタリアートが、その外的条件——制約条件たる現代帝国主義を楊棄して、自己を実現してゆく」といった具合に、「赤軍」¹⁶⁴の対象をもつてのプロレタリアートの形成を指定する方法を、惡意をもつてさかさまにして歪曲し、「ヘーゲル主義」と疎外された批判を

「自分達が党活動を前進させない限り、階級斗争は能動化しない」と主觀主義的に批判し、農業・植民地國、民族解放社会主義——プロレタリア国家継続革命——根拠地化——先進国・前段階決戦——プロレタリア革命戦争の客観的必然性と、この三プロック革命の世界革命戦争としての有機的結合性を否定し、（——とりわけ、前段階決戦——プロレタリア革命戦争を否定し）三プロック革命と世界革命戦争の具体的物質化——推進力として党活動を重視するのではなく、党活動一般を無媒介に強調すること。抽象的一般的堅忍不拔の党を強調し、その内実や攻撃性や能動性の客觀性を否定してゆく党活動を対置し、——対立的ではないのに——第二テーゼを否定してしまう。つまり、三プロックテーゼと世界革命戦争のテーゼを、完全に放棄してしまうのです。

第九に、現代帝国主義の分析の立場、方法、觀点は基本的に正しいこと、三つの欠点もあたらぬことはないが、価値論・剩余価値論・蓄積論・再生産論等、資本主義の原則的批判がガッカリそのままの基礎におきぎれなかつたこと、また、現代帝国主義を農業・植民地國、プロレタリア国家群との関連を、有機的統一的に把える、国際主義・国内的蓄積構造の視点が弱いこと、また、決定的不十分性として、日本資本主義分析が、以上の諸点に踏まつた、その戦前・戦後の歴史的特質を踏まえて提起され、世界、日本革命の綱領・戦略・陣型の基礎がつくられなければならないのだが、彼等は、私の自己批判を利用し、『我が意を得たり』とばかり優越

し、また、現状分析は「具体的の分析がなく、権力対人民になつてゐる」とデタラメをいい、「過渡期世界」把握の立場、方法、觀点たる、三層分析と三つのテーゼを否定していくこと。

第七は、世界武装プロレタリアートの意義を、単なる六〇年代後半の国際的、国内的昂揚といふ現状分析の次元に狭めこの昂揚を、ロシア革命以降の世界史的階級關係の変化と二重写し化している」とこじつけ、ここから「具体的の分析がなく、プロレタリアートを一個の抽象物として抱えることによって、コスモポリタニズム化される」とか、「自然成長論や超階級的武装賛美論が導かれる」とかガナリたて、あげくの果ては「抽象的世界武装プロレタリアートによつて、具体的諸条件が飛び越えられ、空想化、平板化され、一挙的、世界同時革命になめとして、世界同時革命もまた否定されにくわけです。このマヤカシは、自分で勝手に歪曲して、その歪曲を批判するといった、ペテンの方法である。これは、実践的には三つのテーゼを実践に移し、創造的に發展しつつあるアラブ赤軍の同志達をコスモポリタニズムと非難し、敵対するごとに帰結してゆくわけです。

第八は、逆制約の能動のテーゼは、我々の主觀的斗いとは相對的独立に、毛沢東思想をもつての党建設の前進による、民族解放・社会主義の斗いの前進が評価されず、反スターツロッキズムの小ブル傲慢主義の一人よがりの見地にたつて、

感ひたり、にもかかわらず、我々が世界・日本革命の綱領・戦略・陣型の科学的証明に結実させようとする自己批判の意図は全く理解しようともせず、自己の、我々とは反対の日和見主義の受動的、待期主義の「正規の攻囲」に利用せんとするわけです。ともあれ、私の真剣な誠心誠意の自己批判を、自己の優越と思い違いをし、いわれなき優越感にひたり、「したり顔」にトクトクとしゃべる作風が、はじめて同志的作風ではないことだけは、今一度あらためて指摘しておきます。

⑥ 臨總路線とその由来・特質・末露

以上、連赤敗北の総括が、これまでの赤軍派の理論面、実践面での如何なる総括を導くかを清算派の理論と実践についてみてきたわけですが、次に今度は、このような総括がどのような事態をもたらすかを、現在の清算派の実態を中心にみてゆくことにする。

彼等は、「赤軍」¹⁶⁴の抹殺に血道をあげんとするがあたり、弁証法的唯物論、史的唯物論、「法則不在→法則適用論は誤り」なる、わけのわからないわ言な並べたてを否定することによって、放棄してしまった。

また、資本主義批判は中間的反スタマルクス主義の、修正主義の榎原経済学に解体され、これとボルシエヴィキ綱領の講壇化によつて、その階級性と科学性を見失つてしまい、過渡期世界論を「科学的社会主義ではない」と否定し、経済決

主義圈を含む過渡期世界を統一的に把える三層分析の方法や、

三つのテーゼ、三プロックテーゼを完全に否定し尽し、このことによつて、自らを完全な一国主義の非暴力主義のプロレタリア独裁・暴力革命の否定、軍事を組織し指導する党建設の体系を洗い流し、合法主義のサークルに変えてしまつた。また、三つのテーゼや三プロックテーゼを放棄するが故に、民族解放斗争と毛沢東思想等、アジア共産主義に対してもこれを支持し、マルクス・レーニン主義を評価した上で（相対的に）、批判的立場を維持する関係構造を保ち得ず、連赤敗北直後頃は、反スタ・トロツキズムに先祖帰りし、「民族共産主義」を否定し、我々の批判にあらや、今度は無批判に「民族解放斗争＝最前線論」とがなつたり、毛沢東思想に溶解し、先進国に於けるプロレタリアの主体的任務を放棄してしまつてゐる。

現代帝国主義を、価値論・蓄積論・再生産論等の基礎的分析を前提にして、かつ、独占論＝帝国主義論を踏まえ、かつ過渡期世界に於ける、米帝を軸とする国際的＝国内的通貨体制・国独資政策に基づく、国際的・国内的蓄積構造の形成を基本視点にして、三プロック階級斗争の個別性と統一性を把えきれず、従つて、三プロックテーゼが導けず、過渡期世界論＝現代帝国主義論を、「諸階級・諸階層の相互關係」等の、単なる現状分析に解消してしまつて誤りに陥つてゐる。日本資本主義批判に關しても同じことがいえる。

内の「百鬼夜行」の状況の火付け役を担つてゐたことを、羞恥なくしては想ひ起せないでしよう。このような、無責任極まる責任転嫁、責任放棄の逃亡路線が、プロレタリア人民や我が同志達の批難の目を逃れられるわけがなく、彼等の予測に反して、人民の同情を受けることができないことを知らされ、孤立の中で自己の日和見主義を独力で防衛せざるを得ない羽目に陥つた。このプロレタリア人民から孤立しても「日和見主義を開き直る決意」を路線化したのが、いうまでもなく「臨総パンフ」であり、「臨時総会」であつたわけです。（我々は「臨時総会」も「臨総路線」も百パーセント容認しはしない。我々は、同盟第二回大会に向けて、再建協議会＝「臨時〇〇」を中心にして、各フラクの連携を強化してゆく路線をとつてゐる）

かかる歴史的由来故、臨時総会と臨総路線は、理論的・政治的研サンと自己犠牲の精神をもつて、同盟を革命的に統合し、再建していくへグモニーを担う路線とは真反対のものであり、その第一の実践上の特質は、右翼日和見分子・腐敗・墮落の階級的異分子、消耗し尽し斗う意欲を失つた分子等の部分を特殊に含んだ、メンシェヴィズム的傾向の総本山、避難場所であること。八木同志は如何に弁解しようとも、君達が革命的左翼の結集点にはなつてないことを認めざるを得ないでしよう。客観的には、右翼的傾向分子の隠れ場所になつてゐるのです。その一例として、赤軍派にもぐり込み、赤軍

や斗いは、二足三文のかたちで打ち棄てられ、そのことによって、今や清算派は、自らが団結すべき立脚点や党派性を完全に喪失してしまい、使命感を完全に見失つてしまい、かつての赤軍派の同志達とは想像もつかない、墮落と腐敗の淵をさまよい、党派性抜きの墮落したセクシヨナリズムの中によりそい、互いを信じ合はずのしり合い、矛盾を深めているわけです。

彼等の中心は、連赤敗北以前に小ブル稳健主義であり、連赤＝「新党」敗北を契機にして、公然と裏切り的にメンシェヴィキとして登場し、連赤敗北の責任を一切赤軍派になすりつけ（これは、大いに光榮なことです）、「我関せず」で、自分だけ「いい子にならん」とし、このことを権力や大衆に認知してもらわんと、悪しきまであらん限りに、赤軍派の革命的左翼に悪口を投げつけ、自分達と「赤軍派」の区別立てに狂奔した。（つまり、小ブル稳健主義であったことの自認）「赤軍派は連赤敗北とともに、政治生命は終つた」「赤軍派は解散すべきだ」「ブンド再建、日本労働党を建設せよ！」と、錯乱的言動を繰り返していつたのです。Sなどの、赤軍派から一度脱走した分子が、我が者顔に同盟内を徘徊し、指導者風を吹かしてはいたし、とにかく、清算派の諸君は、連赤敗北以降、約半年間、生涯忘れられない程の、右翼日和見主義の大混乱、取り乱しに陥ぢ込んでいたこと。當時、赤軍派

派を裏切り、権力に赤軍派を売り、自己犠牲を要求される部署からは巧みに逃げまわり、生き残り、赤軍派に寄生し、反弾圧戦線で利権をアサリまわつて、救援ゴロのプローカーの墮落分子の潮流を、自らの腐敗墮落故に、統制すらできなくなつてゐるではないか。

第二は、自らの日和見主義を左翼から防衛するといつても革左や赤報派あるいは仏派等の批判は、それ程内的衝撃力をもたないし、又、直接利害関係をもたないが故に、（又、これら部分を全部相手にする力量も氣概もないが故に、彼等は防衛の対象ではなく、もつとも利害関係が深く、内面的せめぎあいの関係にある同盟の革命的左翼からの批判に對して自己防衛に必死になることです。この点に關して彼等は異状な執念を發揮して我々が同盟の統一のために他党派と論戦している時、他党派の主張をとり入れて我々を批判する位の常軌の逸し振りです。つまり、党内の革命的左翼への敵対、これへの矛盾の排外化こそが、第二の特質なのです。

第三は、革命的立脚点と路線の放棄を補うものとして、これにかわって、無内容な小ブル道德の規律主義や、課題が連軌の逸し振りです。つまり、党内の革命的左翼への敵対、赤一新党とは形態は違うが、本質的には同じものとして、「堅忍不拔の党の建設」「自己を共産主義者に打鍛えてゆく」「講壇マルクス主義者になろう」とかのスローガンをもつて、持ち込まれてゆくこと。しかし、これは内容がないが故に全くの見かけ倒しで、無内容無方針故に、組織活動の基調は、サ

ークル主義の囲い込みにならざるを得ないこと。個人的誹謗中傷や「挑発主義だ」「誰それは、我々を支持している」とかのデマをふりまき、又自分達の意見の違う人々にはことさらの分断策動をめぐらし、権謀術数をやり、「公明正大で陰謀術策をめぐらさない」作風は見失をわれてゆくのです。赤軍派らしくない、ブルジョア的作風をはやらしてしまっているのです。結局「堅忍不拔の党」とは、「保釈者集団」がなんとか表面をとりつくろい、アリバイをつくる為の行動以上の域を出ないわけです。保釈者安穏集団の、世をしのぶ仮の姿が「堅忍不抜の党」であると厭味をいわれてもしようがないわけです。

第四に、最後に、「小ブル性の克服・プロレタリア化」とか「共産主義と労働運動の結合」と鳴物入りで、騒ぎたてた、戦術上の方針の実態はどんなものであったろうか？

又、武装斗争にただ反対する為に捏造した、「最小限斗争の重視」、民主主義闘争の重視は如何なる結果に導いたでしょうか？彼等はマルクス主義を放棄し、赤軍派の立脚点を放棄し、人民に結合すべき、共産主義も戦略一戦術も持たないが故に、その結果は明らかです。彼等が思いをこがして接近したが、その方針が民同左派以下的な超右翼的サークル主義の囲い込み路線故に、下層プロレタリアートには肘鉄を食らわされ、「結合」を拒否されたではないか！「部落完全解放の闘い」や「在日アジア人の闘い」との「結合」をめ

对にない。たとえ、一人か二人かが幾ら個人的に努力しても、腐敗堕落した路線を保持している限り、組織の発展など全く幻想に過ぎないこと。従って矛盾の激化と分解は必至ですし、現に現在爆発過程にある。

彼等の末路は、ほぼ以下の三つ位が考えられる。その第一は、彼等が赤軍派戦士として、かつて最前線を担ったという誇りや自尊心を含めて、革命的左翼の歴史の一切を捨てる事をもって初めて可能なわけだが、連赤敗北の直後に鮮明にみられたように、革命的左翼を背後から刺して逃亡した行為を、体系的に理論化して革命的左翼に敵対して、権力の別動隊に成り下る道です。メンシェヴィキからカウツキー主義へと腐敗変質して、革マル、日共の後を、よりショボクして貧相を極めて跡ることです。第二は、革命的な左翼の誇りや自尊心を完全には捨てきれず一抹のもえかすを宿す傾向としての、清算主義の組織的結束も保てず、個々人バラバラになつて、挫折したと称して、それ相当のゴロツキーになら道です。第三は、自らが、一時、権力に屈服し、日和見主義に陥り、日和見主義の小ブルメンシエヴィズムの路線でもってそれを正当化しようとしていたことを、キッパリ自己批判し、プロレタリア革命派の戦列に再結集し同盟の革命的再建に邁進する道です。

我々は、第三の道のみを要求し、第一、第二の道に関しても徹底した批判を加え、その日和見主義性・反革命性を飽く

ざしたが、彼等のそれは、日共や革マルの「解消主義」の小ブル傲慢主義ではないといつて、一日の長を示しつつも、被差別排部落大衆や在日アジア人の立場にたつことを前提にしつつもなおかつこれを共産主義運動と党建設へと組織する闘いを放棄している——といつても、もともと共産主義がないのだが——点で、部落解放闘争や在日アジア人の解放の闘いの最右翼に位置せざるを得ないので、彼等が結合せんとする運動に對して、追随と他方での講壇マルクス主義で対することによつて、最右翼に常に位置しているわけです。ここには赤軍派の伝統的な最前線で闘う、姿勢や牽引力や指導力など、一かけらもないのです。

確かに、「共産主義と労働運動」の結合は焦眉の課題であり、赤報派の如く、烽火派の、大衆追随の改良主義の非難と自己の召還主義の合理化の余り、「最小限闘争」「民主主義闘争」を切り捨ててしまつたのは誤りにせよ、だからといつて、清算主義派の如く、「民主主義闘争」や「最小限闘争」をレーニンの權威に頼つて強調し、實際は、武闘を放棄し、かつ最小限闘争をプロレタリア的・革命的に闘うこと放棄し改良主義に転落することが許されていいわけはないのです。

第五に、それでは、現在の清算主義のメンシェヴィキは今後如何なる結果を迎えてゆくのだろうか？まず確認しておかなければならぬのは、このような清算主義のメンシェヴィキの路線と実態が安穏に、このまま持続してゆくことは絶

ことなく、暴きたてて粉碎し同盟から一掃してゆくものです。

第三節 小ブル動揺・日和見分子・八木同志の連赤総括と党破壊活動を批判す。

清算主義のメンシェビキの親玉格の八木同志の連赤総括過程を跡づけてゆけば、現在の清算派の階級的性格はより鮮明になるし、又我々がメンシェヴィズムやそのカウツキー主義化を一掃し切る為には、我々は八木同志の全てについてマルクス主義の觀点にたつて対象化し、徹底して批判し抜き、このメンシェヴィズムの一切の理論・思想・組織・戦術・作風の全てを根絶し切る必要が絶対にあるわけです。（といつて、八木同志個人を、我々がどうこうすることとは無縁です。彼が自己的メンシェヴィズムを自己批判するならば、我々は喜んで歓迎するが）

八木同志は、何故に、どのようにして、連赤敗北を契機にして、ブルジョア共に解体されたのか？——もつとも、本質的に、連赤敗北の発生・露呈以前に、潜在的には既に敗北していたのだが、その出発点には、ブルジョアマスコミに代表されるブルジョア世界觀による、連赤「共産主義化」——肅清の解釈に完全に解体されてしまったことがあります「共産主義化運動」を「同志殺し」や、これに類する、しかし、これよりは少しましな「同志肅清」、「内ゲバ・リンチ殺人」、「権力欲の為の個人批判」等のその側面を本質とみてしまい、或は

この運動の根底にある階級的革命的本質の疎外化形態のみをみて、その根底にある階級的革命的本質をみないという根本的誤りが存在しています。

彼は、ブルジョア共が宣伝する「同志殺し論」に完全に屈服してしまったこと。この「同志殺し論」は、端的にいえば、

「飢えた狼の共食い」と同じレベルに「共産主義化運動」を矮少化して把え、連赤一「新党」—「共産主義化」の過程を、「超階級的人間が、極限状態」に於て、どのように「本能」をむき出すか」といった類の、人間を特定の歴史的段階の経済的基礎とその社会関係・階級関係から切り離す、ブルジョア医学—心理学—生理学等を基礎とする、まさにその限りでは、全くの獵奇趣味のブルジョアイデオロギーです。ここには、

客観情勢や、これと照應関係にたつ、思想・政治・組織・戦術・理論を検討したり、銃撃戦との関連を解明する姿勢などは、全くないこと。八木同志は、ブルジョア共の「極限に於ては本能をむき出しにする。といったブルジョア人間觀たる主張など放り捨てて、命惜しさになんでもやる」といったこ

闘争の新たな段階への更なる進展、革命戦争路線の徹底的貫徹に向けての、革命主体の依拠すべき階級・階層と思想的・政治的・理論的・組織的武装が問われ、旧来の過渡的路線からの更なる転換が問われ、それは闘う革命主体に、反米爱国教条主義の克服、清算主義のメンシニズムの克服、自然発生的小ブル革命主義の克服の三面の党派—党内闘争とこれと一体に、その内部に、自らの構成員全てに、階級的思想性の検証—闘う姿勢—政治作風・規律の検証を要求する。組織総体をあげた思想—整風運動（修養運動）を、まず要求せざるを得なかつたこと。この対外的・対内的な三面闘争と、代プロレタリア革命戦争を担う、「新党」と「その指導体制」が形成される必然性をもつてゐたこと。

従つて、思想—整風運動II「新党」は、連赤兵士の全体的共同意志であったこと、この限りでは、死んだ同志は勿論のこと「新党」指導部の森君や永田君も例外ではなく、「超階級的人間論の飢狼共食い論」とは縁もゆかりもないこと。この点での森、永田両君への悪意ある誹謗中傷は断じて排されべきです。

(b) この要求されるべき「新党」の内実とは、①弁証法的唯物論、史的唯物論、資本主義批判と科学的社会主義を根本的立場、方法、觀点とするマルクス・レーニン主義、②現代帝国主義—途上国—過渡期社会II現代過渡期世界批判と世

との例証に、『共産主義化運動』、『肅清』を最大限利用してきたわけですが、八木同志は、このブルの攻撃にマンマと解体され、悲觀・絶望し切り、このデータラメな醜悪極まる現認報告を承認し、『挫折』し、その後、この現認報告を基礎にして、驚きあきれかえるような言説を吹きまくり、客観的にはブルジョア供の先兵となつて、働いたわけです。

それでは、『共産主義化運動』は、ブルジョア共や八木君が吹聴する、『超階級的極限人間論に基づく、飢狼共食い論』であつたのか！ 断じて、断じて否です。これ程、連赤一新党指導部も含めて、無原則・無方向・無規律に、或いは、客観的には、ともあれ、プロ共産主義運動とマルクス主義に主観的にも敵対するかたちで、共産主義化運動をおこなつたのだろうか、断じて否です。

我々は、『共産主義化運動』の全側面を、全体的に把えようとすれば、最低限度次のことはしっかりと踏えておく必要がある。つまり、『共産主義化運動』をその本質とその疎外化形態との関連で把える方法的立場にたつことです。又、その本質と疎外化形態の疎外化関係が、どんな関連にたつているかを解明する方向性をもつことです。

②「共産主義化運動」の本質は、七一年を中心にして階級

界II・世界プロ独の世界同時革命、三プロックテーゼと世界革命戦争のテーゼ、世界党—世界赤軍—世界革命戦線の陣型そしてこれに基づく、スタートロ論争の総括と毛思想の評価と反スタ・トロツキズム、毛教条主義の同時相互止揚、④トロツキー式飛び越え「社会主義革命」路線と小ブル民族主義の「反米愛国路線」を同時克服止揚した、反帝反米のプロ独立社会主義革命路線、⑤思想・政治第一II路線II党の生命力を原動力として、プロレタリア革命勢力に依拠するプロレタリア革命戦路線を待機主義の受動的「蜂起」路線と他方での路線II党建設抜きの小ブルグリラ路線や山根路線の克服、⑥党建設の組織の問題、⑦戦術転換の問題、⑧三面戦争、「過渡期世界論」を防衛止揚すること、等に概括されるものであり（詳細は「論叢」164参照）、いずれも、旧来の赤軍派や革左（神）の路線を継承しつつも、乗り越えなければならぬ困難な課題であったこと。

③ だが、この思想—整風運動I「新党」の要求に対しても、その客観的必要条件にはこたえつても、主観的諸条件に於ては、「新党」指導部は赤軍派と革左（神）の総体としての歴史的限界性に規定されて正しくこたえきれず、自らの不完全で不十分な路線を絶対化することによって、この内実II本質を疎外化させ表出させてしまったこと、その限りで、⑨で確認された路線転換の本質は疎外化されて、さかさまになつて悲惨な性質も含めて、表出されざるを得なかつた。

また、このような、客観的諸条件への適応、主観的諸条件に於ける部分的正しさと、全体の誤りの中で、「新党」とその指導部に従いつつも、その誤りや歴史的限界性に批判的な下部の革命的・プロレタリア的な部分を生み出したこと。そして、このような指導部と下部の関係は、思想・整備運動を通じて一種の「党内闘争」的性格を帶び、下部同志は肅清の対象となつていったこと。下部の自然発生的なプロ革命派は、七〇年一七一年の両組織—連赤—「新党」の道程を、もっとも最前線にあって鬪い、種々な新しい経験をもち、新しい感覚、体質をもつていた部分であり、この点で遅れていた指導部とは軋轢を起さざるを得なかつたこと。勿論、このプロレタリア革命派は自然発生的で、自覺的、理論的存在ではなかつたことは確認できるにせよ、肅清者と被肅清者の間にはその相異の特質があり、我々がこの点を強調しているのを歪少化し、「肅」反革命、被肅革命派といふ図式は誤りとして、この相異を看過してしまるのは、やはり誤りなのです。清算派がすべて「新党」と「共産主義化」をブルジョアと同じ観点で否定してしまうのに對して、この意見は、小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への全的路線転換といふ本質の疎外化形態たる共産主義化を、右派に对抗せんとする余り、全て肯定・是認してしまうこと、そのことによつて「新党」指導部が遭遇していく思想的政治的課題やそれへの挑戦との挫折の關係を不問にしてしまうわけです。又、「新党」と

に、その結果は、全て反動的に疎外された結果しか生み出されなかつたこと。彼等は思想—整風運動を起点とする、小ブル命主義からプロレタリア革命主義への転換を、次のようにして挫折・疎外し、決定的反動化を促進させたのです。(⑤)彼等は、この思想—整風運動に對して、從来から確認されてきた「人の要素」—「主觀的能動性」—「共産主義化」等を、ブルジョア人間学(あるいは小ブルジョア)や孔孟の哲学のたぐいに、スリガエ寒行していくのです。マルクス主義の唯物論の方法、史的唯物論の方法、資本主義批判に基づく階級分析の方法に従つて具体的な状況の具体的な分析にたち、具体的に抑圧されたブル人民の資本家権力への、怒り・批判をわがものとしてのに対すること、具体的な国際帝国主義と社会帝国主義の国際的ブル人民・被抑圧民族の立場からの批判、具体的な日本帝国主義への七〇年代革命勢力(ブルタリアー・人民)からの批判をわがものとしてこれを綱領—戦略—陣型—組織—戦術へと対象化すること。自己を、実践と學習(教育)の絶えざる反復の中でブルタリアの前衛へと打鍛えてゆくこと。これ等の唯物論の開かれた、具体的な実践の立場・方法・觀点に對して、具体的なプロレタリア人民の具体的な敵権力への怒り・批判の科学的組織化にかえて、絶対的な「プロレタリア戦士」像・「絶対的共産主義の人間」像の指定とこれへの無限の接近の、超現実的なウルトラ精神主義のブルジョア修養運動を組織したこと。この神の人間像の代行者“現人神”として「新党」指導部はたちあ

その指導部のはらむ小ブル革命主義の変質とその決定的な反動的変質の側面を不問にすることに於て、連赤—「新党」敗北から教訓を引き出すことを閉ざすものです。

我々は、「新党」指導部を、清算派・メンシェヴィキの如く「反革命の同志殺し者」とは全く規定しないにせよ、彼等が闘う人民の側にあろうとしたことを承認するにせよ、また主観的にはマルクス主義を志向せんとしたことを承認するにせよ、だが、客観的には指導部の対応は小ブル革命主義を反動化させた立場・方法・觀点であり、マルクス主義ではなかつたのです。我々はこの点で、「新党」指導部の思想・政治路線は、①全員が資本主義と権力に命がけで闘う姿勢をもつていたこと。(②)毛沢東思想の國際面、歴史面での評価、清算主義の右派・メンシェヴィキ路線や、反米愛國の毛教条派や赤軍派の過渡性の批判を志向し、③「過渡期世界の革命」路線と反帝反米のプロ独社会主義路線を獲得せんとしていたこと(獲得されはしないかったが)。(④)反スタトロツキズム毛沢東教条主義の同時相互止揚を志向したりし、積極的に評価できる面があること。又、次の点でも評価できること。組織面では、思想性、倫理性、組織性や規律・作風を重視し、これの違反者には断乎たる処分をとるという、革命党の規律を守る志向をもつていたこと。(⑤)唯銃主義の決戦論とは言え初めて「銃による殲滅戦」を志向したこと。だが、これ等は、一つの志向でしかなく、しかも決定的弱点をもつていたが故

らわれ、この「絶対神」からみれば、「弱点多き、俗物たる」下部革命的同志へ、彼等の革命的戰闘性、献身性、犠牲心につけ込み、全く不可能なウルトラ精神主義の觀念論の一挙的共産主義化を強要し、次々に死に到らしめたこと。彼等「新党」指導部は、自己を「現人神」としてよそおうことによつて、又そのことによつて自己の指導の誤りを合理化し腐敗を隠すべく、唯物論や史的唯物論の根本的立場を裏切り、孔孟の「天命論」や「天才論」に接近し、又マルクス主義の「路線第一の團結」に對して、「仁、義、忠誠一人の和」「仁政」などの腐りきった反動哲学の支配者思想に依拠しようとしたのです。ここに於て、ブルタリア革命を支配階級の思想・世界觀に依拠しておこなわんとしたが故に、自らを当然にもブルジョア独裁の支配者に変質させてゆかざるを得なかつた。(⑥)男女の性的關係も、社会的政治的人間關係の反映であり一部である以上、男女問題に關しても具体的な状況の具体的な分析を通して、政治第一を中心にして解決されてゆかねばならないのに対し、又、女性ブルタリアが革命家として決起するには、男性ブルタリアと違つて、二重的社会的隸屬からの決起として闘わざるを得ず、そこには多くの試行錯誤が存在すること(といつて、小ブル自由主義の女性解放論やブルジョア的放縫や、ブルタリア単婚制の否定が、肯定されていいわけではない)、正しい女性解放闘争の路線が現実の女性の社会的状態の分析を基礎としてその経済

的解放を機軸にして要求されていたこと。これ等、複雑で深く多面的な女性解放—男女問題に対する実際上の諸問題を不問にふし、これにかわって、一元的画一的な形式的な観念的男女平等論や小ブル自由主義の女権論や、絶対的道德（それは、おうおうにして、禁欲主義や女性蔑視の思想、或いはこの裏返しとしての、超階級的・男女闘争史観の”男から自立した女“、女のあまえをこえる”とかの女性の小ブル自由主義的自立論、等に裏付けられていた）をデッчиあげ、偉大な道徳家、倫理家として下部同志達に対して君臨していくこと。

⑦このようない非唯物論のウルトラ精神主義の「一挙的共産主義化」は、一方では、「共産主義化」のゴールはないが故に、必ず、下部同志を「敗北させ」死なせてしまい、「共産主義化」できるものは一人もいないことが増え立証され、かつ、指導部そのものも、現実の自己と、自己のよそおう絶対者としての「現人神」との乖離からの自らの偽善に気づかれ、自己への不信は、ひるがえって他の同志への不信へと撥ねかえってゆき、又被総括者への不信感の増大となり、内部矛盾を激化せざるを得ず、かかる状態に對してこの「共産主義化運動」の清算は「新党」の崩壊に一挙に発展するが故に、この運動は一層激しく展開され、同時にこの進展過程は、「新党」指導部の強権的支配体制を防衛するものとして追求されてゆかざるを得ない。このようなものとして「集団的暴力援助」と称して、暴力が著しくその「運動」の中で比重をたかめ

性格を小ブル革命主義とその反動化として抱えることを見忘れてはならないのです。

① 以上、多少長く述べてきましたが、八木同志は、自らの小ブル人道主義、道徳主義、或いは超階級的生命論等の小ブル世界觀故に、”肅清露呈”とブルジョア・キャンペーンに腰を抜かし、ブルジョア人間性論の「超階級的極限人間の飢狼共食い論」に屈服し、”肅清”を「小ブル革命主義からブルタリア革命主義への止揚の挫折・疎外化形態としての、反動的思想・整風運動」と正しく規定できず、いぜん同志殺し“の認識にたつてゐること。

この点で八木同志に関して注目しておかなければならぬのは、ブルジョアマスコミに攻撃された場合、「潮流にさからえず」ブルジョアや小ブル共にさえ、「いい子になつてホメてもらおう」とする、小ブル自由主義インテリの「いい子ちゃん根性」が抜けていず、すぐ解体されてしまうセンスであること、M作戦では「もうついていけない」と悲鳴をあげ、銃撃戦にすら沈黙し、七・六や、大衆に党内闘争を還元しながら党建設を闘う党建設の方法を、「紅衛兵型党内闘争はマルクス主義の辞書にはない」とかのたまひ、又、七・六には、腰を抜かして”関西にかかる“とアラヌことをしゃべり”肅清“露呈ではこの小ブル道徳主義は極限に達し、「赤軍派の政治生命は終つた」「即時解散しよう」「連合ブントに自己批判しよう」「ヒタスラひたむきに身を削りつつ闘つたのに

誤りの責任を全体に分散させつゝ、他方では、”逃亡防止“を旨として、非同志的な「大小便タレ流し」の「ローブで縛り」「寒気にさらし」「絶食状態を促進させ」「腕など腐つてもいい氣概」をとき「百が零か」の「修養」を強要したのです。ブルジョア人間学（孔孟の道）に基づく、観念論の修養運動はその階級的本質からして、その方法・手段を支配階級の人民抑圧の方法・手段との同一性を与えてゆくのです。ここには、実践を通じた変革、學習や教育等の、マルクス主義の方法などひとかけらないのです。①又、綱領—組織—戦術上では、以下の問題があつた。現代帝国主義を中心とする三プロックの統一的把握のアイマイ性、毛思想の正しい評価の限界性、綱領—権力問題・陣型問題のアイマイ性、党建設・党組織問題、戦術転換、過渡期世界論の止揚の問題、等への対応の限界性等（詳しくは「論叢」M4、M3）。

以上、みてきた如く、この「共産主義化」運動は、ブルジョア共や八木同志等が考えるような「飢狼共食い論」ではなく、階級闘争の転換に照應する、思想・路線闘争に応えんとするものであったが、それは正しく貫徹されず、小ブル革命主義を反動化させ、ブルジョア修養運動の性質をもつたものなのです。尚、銃撃戦はこの小ブル革命主義の反動化からの回復・止揚の過程として存在していたのです。銃撃戦・肅清と露呈後一年目を迎え、我々は、この点に於て健忘症に陥いららず、連赤—新党の正反両面の特質とその主要側面の根本的階級的

何も報いられなかつた、挫折だ」と泣きごとをのべ、悲観しきり、常軌を逸した発言を続けたのです。又、問題点を組織内討論で解決してゆく作風を軽視し、獄中にあれば、「党も組織もクソもない」と党外のサークルや個人に呼びかけたり、諸雑誌に無原則に自説を書いたりし、一寸した状況の変化にアワテフタメキ動搖してしまうこと。

② ”肅清“を”飢狼共食い論“で分析するが故に当然にも、赤軍派—連赤—「新党」は、正しく正反両面において全體的に把えられず、当然にもオール否定され、赤軍派をオール清算すること。それは次のような理論的経路を跡つて実現されてゆく。”共産主義化“・”肅清“の因を、具体的情勢や主観的諸条件、路線問題、連赤指導部の思想・世界觀（孔孟の哲学がその背骨にあつたこと）等の分析に求めず、これ等と切り離して、無媒介に”小ブル性一般“に求めるによつて、これを、今度は”赤軍派一般の小ブル性“に基底還元し、「”肅清“は赤軍派の到達点だ」と「一が分れ二になること」を否定し、ペテンをいい、理論的にはこの根源を”赤軍“M4に求めてゆく、「赤軍」M4の部分的弱点を絶対化し、実践的には赤軍派の闘いの部分的弱点・限界を絶対化してゆく、功妙な論理を駆使する。要は、肅清の因を具体的な状況の具体的分析抜きに、小ブル性一般に求めたところにこのマヤカシの種がある。

③ 従つて、小ブル性を觀念論の絶対論の見地でブルジョ

ア性と同じか、それ以上に罪悪視し諸悪の根源に昂めてゆき、小ブル性と名のつくものは全て否定してゆく。とりわけ、戦闘性“や”急進性“は全て”肅清“に直結していると錯覚し、自らの日和見主義の穩健主義や消極主義を正当化してゆく。

失敗をオソレテ、闘いを避けてしまふ全般的な消極主義。失敗に関しては、我々は、「斗争—失敗—斗争—失敗……最後に勝利」の毛沢東の観点にたたなければならない。又、小ブル革命主義は、それ自体の急進性、革命性をもって、小ブル日和見主義や小ブル・メンシェヴィズムの合法マルクス主義と闘争しつつ、革命的マルクス・レーニン主義＝プロレタリア革命主義へ自己止揚してゆけることを否定していること。

④ 観念論の絶対論に基づいて、”小ブル的思想性”を特別に取り出してゆくことをもって、同志八木の所有する小ブル思想主義を極限にまで拡大し、思想をマルクス主義的に把握する観点を喪失し、神秘化し、天賦論の見地に立ち、「赤軍」の資質を問題にする如く、「新党」指導部の裏返しの天命論の天才論に陥りつつある。他方では、小ブル思想主義は、講壇マクス主義となつてあらわされること。

⑤ 小ブルインテリゲンチャ特有の「小ブル出立の宿業論」みたいな独特の小ブル觀をもつてゐる。

⑥ 前節でみた「赤軍」¹⁶と赤軍派の実践の右翼日和見的清算の数々——その最大な犯罪は、コズモポリタニズムと括の方法です。それは観念論の、結果解釈の清算主義として既に確認されているわけですが、我々は、これを彼が好んで多用する「”肅清”は、赤軍派の必然的到達点だ」という方法です。（又これは立場、観点でもあり、この言葉に彼の全ての考え方・思想が凝集されているわけですが）この言葉こそは、事態を簡明にえぐつてゐるようで、多くの人々を大混乱に陥し入れ、清算主義に転げ込ませる決定的通路だったわけですが、これ程事態を具体的に分析し、情勢や諸条件の変化に応じて「一が分かれて二となる」という、唯物弁証法の根本原則を否定する巧妙な論理はないわけです。

前段階蜂起—H J 戰争とその総括、「人の要素—前衛の軍人化・軍の中の党—遊撃戦」として開始された第二段階、第三段階に於て、客観的諸条件、主観的諸条件の中で、徐々に「一が分かれて二となり」始め、三分解現象を必然化させざるを得なかつたこと、又ここからM L 主義のプロレタリア革命派が生まれる必然性があつたこと。と同時に、小ブル革命主義の反動的要素が全面開花せざるを得ない必然性があつたこと。

このような唯物弁証法的な七一年の階級闘争を中心とする事態の矛盾的発展を、一切捨象することよつて”肅清”（銃撃戦）の連赤—「新党」を全否定しつつ、「”肅清”は小ブル性に因る赤軍派の発生時からの小ブル性に問題あり」とし「創生赤軍派—”肅清”」との過程を一切抜かして、直

称して、プロレタリア国際主義の精華たる三つのテーマを清算すること、そして今一つは、事物を唯物論の弁証法の見地にたつて相対的、全体的に、正反両面で、また「一が分かれて二となる」観点等で把えようとしてないこと。

⑦ 唯物論の能動的反映論の見地とは似而非なる、法則否定の、観照主義、表相反映鏡、結局は現象論故に、言説に理論的体系性や一貫性がなくなること。不完全な薄平な、反映論としての現象論主義、実践的にはプラグマチズムになる、評価家の文筆家。

⑧ マルクス主義の資本主義批判に於ける、剩余価値論の軽視と榎原修正主義経済学への解体としての「労働と所有の分離論」の強調。

⑨ 無定見、無節操、無体系に、プラグマチズムの情況反映主義的に文章を書くこと、文章に責任をとらないこと、八木同志はこのことを総括するまで一度筆を断つ位に真剣に考えるべきだ。

⑩ 八木同志の、肅清露呈以前の同盟内での立場に關しては、同盟内の小ブル穩健主義の立場であり、とりわけ、保釈出獄を迎えることによつてこの立場を如何に実践化するのかをめぐつて、既に彼のその後の小ブルメンシェヴィズムの清算主義の方向は明確化してゐた（「緊要の任務」参照）。この立場から、肅清を①～⑧の如き観点で総括していくわけですが、我々が注目してゆかなければならぬのは、その総

線的に総括すること。このような総括方法は連赤—「新党」指導部の特殊な直接の責任をアイマイにして、全てを「赤軍派」に責任を転嫁し、主要には否定的な「新党」派の特殊直接責任と、我々の主要には肯定的な発生基盤責任の区別と関係性を明確にする、責任解明に対して、自らの清算主義の逃亡を正当化する為に、又、我々を清算主義の土俵に引き入れる為に「責任転嫁だ」とか称してケチッケををするわけです。

このような観念論の清算主義の方法に対し、同じく観念論の教条派は、同じく情勢と諸条件を通じて、小ブル革命主義が分化したことが分析できず、小ブル革命主義の反動化の「肅清」を許容してしまつのです。

（我々は、これまで、「新党」指導部と我々の關係に於ける区別と同一性に於ける関係性、従つて責任のとり方につけ、今一つ原則的な立場を、その方法、観点まで含めてマイナス点をもつていたが）——とても基本線は十分明らかにしていたし、アレコレ批判されるべきものではないと考えるが——以後、この点をよりはっきりさせてゆくつもりです。）

ともあれ、我々は、八木同志等の「”新党”派に責任を転嫁することは出来ない」という、一面においては正しい側面をもつた主張をもつて、今度はこれを悪用しつつ我々と新党派との區別と同一性の関係性を切り捨ててしまつて、赤軍派

に全面責任転嫁する論理・方法のペテンを厳しく暴き抜いておく必要があるのです。

第四節 『ル4』批判への理論上の反批判の諸論点

① へ「法則発見と法則適用」の態度は正しいこと。へ－ゲル的な藤本進治の「内的矛盾の自己展開」の自然成長論に陥っていたのは八木同志であること——過渡期世界把握の三層分析の方法、史的唯物論の放棄と事実の羅列、歴史記述主義としてのブルジョア実証主義への転落へ

最初に「法則返見—法則適用」の問題ですが、これは、スターイリンの「ソ連邦に於ける社会主義の経済的諸問題」の論文の中での、「法則適用に対する態度」に対し、黒田が「現代唯物論の研究」で「法則主義だ」と「社会科学の対象は人間であるから自然科学のまゝにかなへば、法則と法則性は違う」とか、わけのわからないことをいへ、スターイリンの「人の存在しない法則適用主義」を批判したまではよかつたわけだが、結局「人間」を異常に強調し、唯物弁証法（弁証法的唯物論）、史的唯物論（唯物史観）の命題を否定していったわけですが、連合ブンドの諸君は、この黒田の所説に飛びつき、我々を「法則適用主義」とか、わけのわからない批判をしてきたわけです。これに感心した八木同志は、自分の当時の藤本進治の哲学への傾倒、又それに表現された、関西ブント以来の自己の自然成長論を反省する意味合ひを隠して、私にそ

きた既存の生産諸関係とあるいは、法律的表現に過ぎないものであるが、所有関係と矛盾するようになる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、或いは急激にくつがえる。このような変革を考察するさいには、自然科学的精確さで確かめることが出来る。経済的生産諸条件に於ける物質的変革と人間が、この法則を意識し、又それを闘い抜く、法律的・政治的・宗教的・芸術的或いは哲学的な、つまり、イデオロギー的諸形態とはつねに区別されねばならない」「……社会的生産力と生産関係との間に衝突があるということによって説明しなければならない。大把みにいって、アジア的・古代的・封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成体のあいつぐ諸時期として表示される」（以上全て、マルクス「経済学批判」序文）

・「歴史がつくられるのは、最終的結果がつねに多くの個別の意志の衝突から生じるという形においてである。それ等の個別意志のおののものは、これまで多くの特殊の生活諸条件によつて現在あるようなものにつくられているのである。従つて、そこには交互に交錯する無数の力、力の平行四辺形の無限の群があつてその中から一つの合成力——歴史的成果——が生じてくるのである。その合成力自体は、さらに全体としての無意識かつ無意識に作用する力の所産とみなすことが出来る。——こうして、從来の歴史は一個の自然過程の仕方で経過しており、そして又本質的には同一の運動法則にしたが

の反省を代行させようとしたわけです。だが、私は「赤軍」16.4を執筆した以前から、藤本進治の組織論は卒業していたし、勿論、関西ブントの政治過程論は完全に批判していた。そのようなことは、上京グループのTA(M)、TA(K)、「赤軍」16.4の第四章部分（八木同志執筆）の展開方法や内容をみてもらえば、これが「革命の哲学」にウリニつであることを発見されるでしょう。八木君は自分を自己批判せず、卑劣にも私に自己の誤りをおっかぶせてします。このようなり方は宇野経済学の総括に關しても共通しています。私は「労働力商品としてのプロ」という用語は使用しているが、決して「労働力商品所有者」という小ブル個人主義の概念は使用してない。この用語は、第四章では存分に使われているわけです。又、余談ですが、自分の反省としての「主体的唯物論」の総括をも又、私にナスリつけていること。さて以上を踏まえた上で、マルクス・レーニン主義の史的唯物論や弁証法的唯物論に対する立場・觀点をみておこう。

・「いっさいの自然現象の基礎には物質的原因があるから同様に、人間社会での社会の発展も人々の意識から独立した一つの自然史的過程である。」「……人間の意識が彼等の存在を規定するのではなく、疲等の社会的存在が彼等の意識を規定するのです。社会の物質的生産諸力は、この発展のある段階で、それらが、それまでの内部で運動して

つてゐる」（エンゲルス「J・ブロッホへの手紙」「フォイエルバッハ論」）

・「自然においてはそこで交互に作用し合うのは、……まったく意識のない盲目的作用力である。これに反して社会の歴史に於ては、そこに行動しているものは、たゞまつたく意識を賦与され、考慮または情感をもつて行動し一定の目標を目指さして努力するところの人間のみである。そこでは意識された企図、意欲された目標なしには何事も発生しない。けれども、それが如何に歴史の研究にとって重要であろうとも、歴史の経過がある内面的な一般法則によって支配されているという事実は、いささかの変動をも与えない」（エンゲルス「フォイエルバッハ論」）

・「この仮説が、はじめて科学的社会学の可能性をつくりだしたという、もう一つの理由は、社会関係を生産関係に還元し、そして、この生産関係を生産力の水準に還元することだけが社会構成体の発展を自然史的過程として考へる為の強固な基礎を与えたからである……（たとえば主觀主義者は、歴史現象の法則性をみとめながらも、歴史現象の進化を自然史的過程としてみることは出来なかつた——その理由は、彼等が社会的觀念や人類的目的にとどまつていて、これ等の觀念や目的を物質的社会関係に還元することができなかつたからである）」（レーニン「人民の友とは何か」）

以上、マルクス、エンゲルス、レーニンも人類の歴史の發

展、自然の法則的存在とは人間が歴史を創るという意味でその差異を認めつつもそれ故に、上部構造の下部構造への独自性や反作用をみとめながらも、「自然史的過程」として「法則」として考察しているわけです。

以上で、もってノル木同志の批評は全くマルクス・レーニン主義を否定するかたちで展開しているのは明らかです。

て原理的・哲学的に体系化しようとした観念論」（臨総報告 ピラ）が誹謗中傷であると同時に、実際は、史的唯物論を放棄し「歴史的・具体的な階級闘争」と称して、全く分析の立場・方法や観点のない単なる事象を羅列する歴史記述主義のブルジョア実証主義の見地への転落であること。そうでなくとも、單なる世界把握は「情況分析」に矮小化されざるを得ないこと。彼の文章の表相的な観照性、歴史記述主義、羅列主義を想起せよ！

現実世界を正しく把えようとするならば、正しい弁証法的唯物論を基礎にして、世界史の発展段階を如何なる生産様式の段階かを指定し（階級闘争が如何なる性格の如何なる段階のそれか）、その上にたって、資本主義の発展段階を指定し階級闘争を分析し、それを踏えつつ現状分析をする、（弁証法的唯物論）→史的唯物論→現実形態としての資本主義批判→現状分析、の三層構造をとらなければなりません。これはマルクス主義の常識です。

き主張」「観念論であり、唯物史觀とは反対のものである」とは言えないし、全くのひどい誹謗中傷です。このような批判を加えることによって、過渡期世界論を根底的に統一的に把えることが出来ず、八木同志の世界分析は単なる浅薄な事実の羅列の、現象主義になつてゐるのであります。

オロギー形態、はじて團結形態が何一つの原理（歴史的実践の弁証法）に沿つて自立的に展開しているかの如き主張」「否、現実の階級闘争は、この原理の自立的発展・展開に貫かれ、むしろ発展・展開の場として把えられている」「これは藤本進治の『革命の哲学』に依拠したものであるが、プロレタリアートの階級闘争を何かその”内的矛盾の原理“の展開——本質と形式の矛盾の自己展開、自己疎外、自己止揚を通して本質を実現してゆく過程」「この見地はブルジョア的な主体的唯物論の一形態であり、結局は日々の階級闘争の傾向性を抽出して、それを原理的・哲学的に意味付ける……、自然成長論の主觀主義と母胎論の根拠でもある」（臨総バンフ五五〇六頁）

私は、これをそつくりそのまま八木同志個人の自己批判として受けとめる。しかし、八木同志の旧来の関西ブンド主義の克服の水準に、それを越えて進んでいる赤軍派の水準を二重写しにして、赤軍派にナゾラえてもらったは全く困ります。自分に於ける狭い体験、水準をもってきてそれを赤軍派そのものの総括

私はこのことを、パンフ『赤軍』164の第一章第一節で述べたにすぎない。そして、第一節でこのような三層構造の分析方法（正確には四層か）をとらない限り、過渡期世界は、非資本主義圏や社帝が存在するが故に、とりわけ、把えきれないことを主張したのです。又、第三節で唯物史観の次元での規定と現実形態性の関連が、ロシア革命をもってどのような関係にたっているかを、とりわけ詳しく分析し、第二次ブンド内部にあった論争とこの偏向に対する注意を、「前提の修正と接近の方法の二つの誤ち」の第四節で、一方での、スター・ブハヤン修、革共同等の「体制間矛盾論」的偏向や史的唯物論を万能化する偏向（我が同盟の一部にあったU同志やT A 同志等の傾向を危視して）、他方での、旧來の旧ブンド系や青解派等の単純反帝一元論を批判したものです。つまり現在でてきているような「史的唯物論万能主義」や「単純反帝一元論」を当時から自覚して批判しているのです。

これらの提起は全て正しいし、眞面目に「赤軍」¹⁶⁴第一
章を読んだ人ならば、現在でも十分有効であるばかりか、増
々その正しさを証明しつつあることが十分把握されるものと
考へる。そして、このような立場・方法・観点によつてのみ
現代過渡期世界を科学的に把えられるのです。このような観
点が、「プロレタリアートの組織形態、闘争形態、イデオロ
ギー形態が何か一つの原理にそつて自立的に發展するかの如
きのではあります。

章を読んでもらえば、このことはすぐ理解してもらえる。イチイチ引用するのも面倒ですが、代表的な表現を引用しておきます。「現代過渡期世界を、それ自身、世界プロ獨一世界社会主義へと変革すべき変革主体」＝プロレタリアートの世界的な存在様式、自然発生性とその内的矛盾の対象化された世界と把え、従って過渡期世界の変革＝対象変革自身を、同時にこのプロレタリアートの内的矛盾の止揚＝世界的階級への形成の運動として把える「資本制分業の社会的－政治的存在的様式を意識的にこえてゆく階級の結合形態を世界性－社会性暴力性として体現し……、原理的に指定される世界プロレタリアートと世界ブルジョジーの階級闘争が世界革命戦争として現実形態化するものとして指定する」（二八頁、傍点塩見）「ここに攻撃型階級闘争の本質的根柢がある」（二九頁）これは完全に藤本の「革命の哲学」そのものです。これこそ「内的矛盾の自己展開論」でなくしてなんであろうか！　これならば、明らかに自然成長論の主観主義として総括されるのは当然です。

八木同志は、私の三層分析に基づく三つのテーマに特徴付けられる「攻撃型階級闘争論」を藤本進治の「革命の哲学」と誤解して、理解したものと考え、実は、攻撃型階級闘争を

何一つ理解してはいなかつたのです。これでは、彼が「藤本批判」を必死でやり、攻撃型階級闘争を単なる「思ふ付き」と考え、否定せんと努力するのも当然のことです。

「客観的存在の仕方それ自身の中にもつ矛盾によつてその革命性が規定される存在であった。主観的生産力といつて存在形態のうちに、労働力商品所有者（塩見注・彼はこの文言をつかつてゐる）」私的商品所有者（まさに宇野そのものだ）

といつてブルジョア的存在と、機械制大工業の世界的発展と共に付与される世界性・普遍性・組織的な全体性を、……資本主義の展開過程に内的に規定されつて前者の止揚と後者の現実的獲得へと到る階級形成」（二九頁）

まさに「内的矛盾の自己展開」！観念論の自然成長論の権化！驚くべきだ！しかも「労働力商品所有者」私商品所有者」という、宇野の用語をおそれげもなく使用していく。全くもつて、八木同志の総括を赤軍派の総括としてもらつては困るのだ。——しかし、彼は卑劣にもこのことを述べ、平気で傲慢にもデマるのだ！実際に、第四章と第一章～第三章までは全く展開の方法も立場も、迫力も全く違うといつものなのだ。連合ブンドは、この第四章をもつて「藤本進治だ！」とデマを流しまわってきたわけだ。この点、今となつて我々は、第四章が「攻撃型階級闘争論」とは違う、似而非なる、藤本進治の「革命の哲学」であったことを確認し、この克服を訴えるものです。

「原則的資本主義批判が一律背反の一語で片づけられる」とかのケチつけをしているが、確かに、我々の当時の歴史的成长段階に規定され、価値論や剩余価値論、蓄積論、再生産論、等「資本論」の内容をしつかり把握し切れていない面はあるが、それでも、「我々の立脚すべき地点」の九頁では、剩余価値論による賃金奴隸制批判を厳密ではないにせよやつてゐることからしても、「科学的社会主义の立場、方法、観点がない」などといつのは全くのウソである。

又「資本主義的生産過程—流通過程の関係を機軸とする分業諸関係」として、「機軸」を主張してゐるし「生産関係を分業に解消」してはいないこと、「市民社会の総括としての国家」に対するアレコレの言説はケチッケ——「立脚点」をみよ！これがイチャモンづけであることはすぐわかる。私は「立脚点」でちやんと「国家と革命」の観点を展開している。尙「生産関係を分業問題に解消してゐる」のは「資本制分業関係の社会的存在様式を意識的に越えてゆく……」（総集、「赤軍」16.4、二八頁）と述べてゐる如く八木君であること。

「労働力商品」ということにプロレタリアートの基本的特徴をみるのはブルジョアジーの観点」と、榎原君に立脚して批判せんとしているが、「労働者が、労働力を売る以外には生まゆげず労働力商品として資本そのものになること」をプロレタリアートの最大の特徴とするのは全く正しい。「労働力

②へ直接的生産過程に於ける「絶対的、相対的剩余価値の生産」を忘却視し、榎原修正経済学に解体されている八木同志、「労働力商品所有者」を使用する八木同志

八木同志等は「赤軍」16.4を「科学的社会主义ではない」とテラメを吹聴してまわつてゐるわけですが、「16.4」一九二頁（赤軍派政治理論誌総集）をチャント読んでもらえれば、これが嘘であることはすぐ明瞭になる。

「プロレタリアートの革命のあり方を指定し、実践的な共産主義とその運動の成立と展開の在り方を導き出す。これは主要には唯物弁証法を基底とする唯物史観とマルクス主義経済学とを、かかる意味での階級闘争史観と階級闘争関係として把え直しここから革命論実現の方法に取りかかる」「もともと革命論は、ブルジョアジーとプロレタリアートの間の唯物弁証法的な、歴史的な闘争関係の確認及び、これと一体をなすブルジョアジー打倒の戦争の勝利をめざす能動的な実践的歴史観を、即ち、唯物弁証法—唯物史観—マルクス主義経済学を前提として与えられる」「プロレタリア世界革命の歴史的・経済的基礎である、母体たる資本制生産から形成される過剰な生産が、自らの生成そのものである国民経済の……」（三九四頁）等として、資本の生産・蓄積からプロレタリアートの対象たる資本の分析・批判を機軸にして共産主義革命の不可避性・特質・諸条件等を展開している。

商品所有者」と規定すればブルジョアジーの観点になるのだ。問題は、プロレタリアートはブルジョアジーの奴隸であり、経済（学）上は資本そのものであり、生産過程でも再生産過程でも資本のもとに縛縛されてゐること、従つて資本と労働の関係は交換関係ではないこと等からして、宇野の如く「労働力商品所有者として、プロレタリアートを独立した商品所有者の如く使えるのはブルジョア（or小ブル）イデオロギーであること。このブルジョアイデオロギーに毒されたのは、「16.4」第四章でも明らかに、同志八木君であるわけです。同志八木は「労働力商品」と「労働力商品所有者」を混同し、自分は「労働力商品所有者」という用語を使用しておきながら、これにふれず自分のことは棚にあげて、私を、ウソの事実を捏造した上でこれを批判しているわけです。

尙、八木同志は榎原経済学に解体されて宇野批判をやるわけだが、そのことでもって、直接生産過程に於ける絶対的、相対的剩余価値の生産を通して賃金奴隸制が再生産されてゆく、決定的観点を見失つています。これは序章16.5やこのパンフでも明瞭です。

本と賃労働の関係を価値関係とみなし」として資本と賃労働の関係は交換関係ではなくても価値関係ではあるものを梗原君と同じ誤ちを犯している。

(3) 資本主義生産—ブルジョア民族国家—国際的暴力的競争の連関の無理解からのプロ国際主義の無理解と一国主義／八木同志は私が「ブルの一国性とプロの世界性」という二

大階級の最も重要な特質を一つ展開支点にしつつ資本主義批判を基礎にしてプロレタリア世界革命の必然性、条件、特質形態、目的たる世界プロ独・世界社会主義・世界共産主義の不可避性・合理性・等を説明する主張に對して異常な執念を燃やして、突っかかって来、「小ブルジョアの眼からみたプロレタリアートの観念的解釈」、「二大階級の形而上の分類をスコラ的解釈学として展開している」とかの誹謗をおこない又、「世界市場のみからプロの世界性を根拠づけている」「プロに世界性なる属性が出来そなわっているかの如き深淵なる思想」などと、歪曲やウソを言って、プロレタリア国際主義とプロ世界共産主義革命（世界同時革命）の科学的根拠を踏みにじり、自らの混乱と一国主義を正当化しようとしているわけです。

又、この一国主義の觀点を更に発展させ、世界把握の三層分析の方法やプロレタリア国際主義の精華たる三つのテーマを清算してゆかんとしているわけです。この意味でこの点に関する八木同志の反批判は、パンフ¹⁶⁴の防衛と發展にとつて踏みにじり、自らの混乱と一国主義を正当化しようとしているわけです。

を制度として確立する為に、租税、公債、郵便、交通、教育、軍隊、治安等のブルジョア国家制度を確立する中で形成されていった。この意味に於いて、資本主義とブルジョア民族国家とはその歴史的起源からして不可分一体の下部構造たる前者の、後者は上部構造であるわけです。

ブルジョア民族国家は、封建的経済關係とその国家に対し一步歴史的進歩性を示し、資本主義生産はこのブルジョア民族国家を横杆してその社会的生産を飛躍的に増大していったのです。

しかし他面では、全世界の地球的視野からみれば、この、資本主義—ブルジョア革命—ブルジョア民族国家は、全世界を無数のブルジョア民族国家によって細分し、これを固定し、機械制大工業をもつて開始された無限の生産力の発展・生産の社会化・国際化をおしとどめる役割りを担つたのです。つまり、資本の剩余価値追求の本性からして、資本は全世界を自己の搾取、収奪、支配の下に統治せんとする人狼的渴望をもち、総資本としての資本が完全に搾取、収奪、支配を横していいる本国経済内にとどまるものではないこと、それ故に、総資本の世界的・国際的支配の欲望は自らの暴力^{リブルジョア}軍隊を初めとするブルジョア国家の暴力装置に立脚して他資本主義国家や他被抑圧民族を支配せんとすること、このことを通して市場細分割と領土占有戦の暴力的対立が恒常的に展開されざるを得ないこと。即ち、資本主義にとって自己の

て決定的な地位を占めていると考え、ガッチャリ反批判してゆくことにします。

(1) 「ブルジョアジーが世界市場を前提としつつもこれは国民経済—市民社会の総括としての国家を媒介にした世界性でしかない。（その限りでブルジョアジーは経済的範デュウの人格的表現としては世界的でありながらも、経済—政治の総体に於いては一国的でありそれは別の側面に於て、即ち支配階級としてあることを意味する）」（総集三頁）

これは断然正しい命題ですが、八木同志はまずこれにケチをつけようとするわけですので、この命題をより詳しく説明しておくことにする。どうも八木同志は私への反撲が昂じて私の述べることには、なんでも反対して、反対のことを言わないと気がすまないらしく「ブルジョア階級の国際的性格」とかの用語に代表される如く、ブルジョアジーの最大的特質たる「ブルジョアジーの一国性」を否定していっているようにも考えられるので、この点にも留意しつつ、問題を提出していきます。

ブルジョア階級は資本制生産と商品経済の生成、拡大とともに発生し、機械的大工業の発展を挺子とした、資本主義經濟に種々に分断された地方經濟や中世經濟の分業諸關係が解体され、一般には民族を単位とする国民經濟に单一化される中で階級として形成され、対外的には対外的競争戦、領有戦や貿易戦に共通関税、対内的に賃金奴隸制度、私有財産制度

国際化・世界化は、他民族・他ブルジョア民族国家の搾取、収奪、暴力的打倒を通じて以外には実現されないわけで、この点に於てブルジョアジーはその歴史的・經濟的基礎からして、一国的・ブルジョア民族的しかあり得ないのです。決して国際的・世界的特質を本性としないのです。又、資本主義が利潤追求の熱望に規定されて巨大な生産力を生み出し、生産の社会化・国際化を無政府主義的に形成してゆくに對して、初めは、その促進要因として機能していたブルジョア民族国家は、今度は桎梏となり、ブルジョア民族国家相互間の国際的な暴力的競争戦という形式をとつてしまふにかかるなくなるわけです。この意味で、ブルジョアジーの世界性は擬制的でしかないのです。

つまり生産の社会化・国際化（これも社会化の一つ）に対して、ブルジョア民族国家は、私有財産制度とともに決定的を桎梏物とならざるを得ないこと、これが資本主義とブルジョア民族国家の歴史的運命なのです。

以上の意味あいにおいて、上述の「赤軍」¹⁶⁴の言説を理解すべきですし、又その正しさも明らかなわけです。

(2) 資本の利潤追求、無政府的競争とそれを通じた資本の蓄積、その国内的国際的展開は、常に、資本のもとに包摂されたプロレタリアの搾取・抑圧を基礎にし、又その競争戦の犠牲をプロレタリアートに転嫁しつつ遂行されることに於て、プロレタリアートは、その所属する民族の如何にかかわらず、

何んらそこから利益を享受しないし、犠牲だけを押しつけられる性格であること、又この自己犠牲的国際競争戦を通じて、ときにはそれは、労働力の国境を越えた移出入という特殊な事態も含めて、プロレタリアートは国際的・世界的視野を広めること。このような意味に於て「プロレタリアートは祖国をもたない」のであり、全世界のプロレタリアートは資本主義に對して、又ブルジョア民族国家に對して、共通の、これを廃絶せんとする立場を確けるのです。以上からして、プロレタリアートは単一の世界階級として生長してゆく經濟的事歴史的な必然性をもつてゐるのです。

又、資本制生産の無政府的發展を通して生産力の高度化、生産の社会化・國際化に對して、ブルジョアジーがブルジョア民族国家を通じて国際的暴力的競争戦に於てしか対処し得ず、本質的に資本制生産の拡大とブルジョア民族国家（ブルジョア民族国家による分断・固定化）の矛盾を解決しないのに對して、プロレタリアートは資本主義が生み出した巨大な生産力の無限の發展・生産の社会化・國際化に十分対処し得、私有財産制度とブル独としてあるブルジョア民族国家を解体し、生産手段を共有化し、目的意識的に生産力を単一の世界的生産力に世界的に配置し、世界的に共産主義的生産関係を組織することによつて、これに十分対措し得る能力をもつてゐるし、又プロレタリア世界革命は資本主義生産の發展とブルジョア民族国家（その中核としての私有財産制度）の矛盾の國際的規模での拡

大の中で、不可避に發展し、生長してゆくのです。

八木同志は、このような「プロレタリア国際主義」の科学的把握が正しく統一的に把えきれず、臨總バンフでは全くバラにしか把えきれず、結局一國主義に陥り込んでゐるの

です。

以上からして、プロレタリアートの国際的性格は、対象自身の性格からして、歴史的に必然化されるものであり、まさに生来的に「世界性なる属性」を保持している、と主張するのは全く正しいわけです。このような意味に於ける私の「赤軍」^{16.4}の三〇四頁の、「プロレタリアートは国民经济が世界市場と一体となつて成立し、かつ世界市場を前提として成立することに於て、もともとその物的姿態としての労働力商品が世界的であり世界性をもつことにおいても、自由で普遍的で世界的である」ということに於て存在する」の文言にアゲ足をとり、「世界市場のみからプロレタリアートの『世界性』を根拠づけるのは全く一面的で、現象論的である」と批判するわけですが、私は、世界市場からのみの「世界性」を説いてはいない。^{16.4}の四頁の前半部でも明確なように、資本の国内的・國際的蓄積、國際的暴力的分割戦の観点からも説明していること。

尙「物的姿態としての労働力商品が世界的であり、世界性をもつことに於ても自由で、普遍的で世界的である」の命題は、厳密性を欠いた表現であるにせよ、「物的姿態としての

初めとする、三つのテーマの全面否定に發展してゆき、反スターライク主義と毛沢東思想への迎合をせわしなく往還しつつ浮動を極めめるわけなのです。

尙、資本主義生産—ブルジョア民族国家—國際的暴力的分割戦の連関構造は、過渡期世界に於て極限化し、多国籍企業（実際はチャント国籍はある）という資本輸出の形態にみられる如く、帝国主義相互の暴力的対立が極力回避される関係の中で、ウルトラ國際独占体が形成され、ブルジョア民族国家と矛盾を深める關係になつてゐる。ブルジョア民族国家は一面では、ブルジョアジーにとってさえ桎梏になつてきているのです。

この辺の問題に關しては、我々は現代帝国主義とブルジョア民族国家という觀点にたつて、種々な問題を提起するつもりです。

④へ「三層分析の方法への捏造の上での批判」

三層分析の方法への自己の藤本哲学の視野からの「世界の本質規定」、「本質と擬制の内的矛盾」の自己疎外体—本質の實現の獲得“とか、「原理が展開する為の外的条件、制約条件として把える」のデータラス極まる勝手な捏造的批判をおこなつてゐる。辱しく思え！

⑤へ「コスマボリタニズム」という批判をおこなつて、プロレタリア国際主義を投げ捨てるなど

「世界武装プロ」は何一つとして、ヘーゲルの如き世界の

本質的規定として述べているのでは全くない。ロシア革命の成立を契機とする、極めて具体的なプロレタリアートの成熟度、国際的な階級関係を世界史的視野から把えたものであり、

何んら抽象物でもなければ神秘的なものでもない。八木同志は、自己流に「革命の哲学」の観点にたって、自分勝手に観念的に把えてアレコレ批判しているのです。まさに「自分で〇をもちあげて、自分の足を打っている」のです。

この「世界武装プロ」をして表現されたロシア革命のそれの切り拓いた、階級関係の根本的変化は、確かに六八年一〇・八〇一一一二の激動の中で国際階級闘争の昂揚に直面して把みとられたものであり、それは決つして単なる現状分析的認識の問題ではないし、「国内大衆武装—アジア人民の武装—ロシア革命以降の武装の前進」を二重写しにしている見解でもない。我々は六〇年代後半の情勢をまさに三層分析と三つのテーマによって把えたのです。

「世界武装プロの提起は、具体的条件が飛び越えられ、空想化、平板化され、一挙的世界同時革命となり、それまで日本革命は「なし得ない」という急進的コスモポリタニズムとなる」に至っては、なにおかいわんやで、世界同時革命は歪曲され投げ捨てられ、プロレタリア国際主義は急進的政治的基礎をもつてゐること。主觀的には中・朝・ベ・アジア三国党の前進を条件として、能動化していくこと。これ等のことを抜きにして、「党的問題」を軽視し、スターリン主義を無視しているからこんな把握がされるのだ」ということは全くあてはまらないこと。その他は、三節で展開、繰り返さない。

四・一〇 執筆完了

註記

本論集において論究されている清算主義文献は次の通りです。

- 一、プロレタリア革命党建設とわれわれの緊要の任務（上）
八木健彦著
- 一、再生にむけて 赤軍派都委員会発行
- 一、共産同赤軍派臨時総会報告集 共産主義者同盟赤軍派中央委員会
- 一、共産同赤軍派政治機關誌、再刊一號 共産同赤軍派中央委員会

☆印刷者による後註☆

予定された刊行期日より若干の遅れをみて読者に届けられることをまず最初にお詫びしておきたい。本編集『論叢』^{16.6}は予告されたとうり「一向過渡期世界論の防衛と發展のために(1)序論」として刊行される。ただ諸般の事情により参考論文として復刻される予定であつた「8・3論文」「ゲバラリカストロ路線とわれわれ」の二論文は、次集『論叢』^{16.7}として繰り込ざるを得なくなつた。御寛恕を乞いたい。次集もほんど時の経過を待たずにお届けできる予定である。一尙、本論集『論叢^{16.6}～⁷』に関して、或いはまた、第一集以降の諸論文に関して読者諸兄姉からの御批判、御意見等を広く塩見同志のもとへ寄せて頂きたく、お願ひしておきます。

☆ 東京都葛飾区新小岩一丁九の七 あけみ荘二号室

塩見方「論叢」係 宛

もしくは

と/or にあったのです。

(6)へ「被制約の能動のテーマ」の否定による攻撃型階級闘争の否定▽

被制約の能動のテーマとして概括された、三プロックテーマが自然成長論として放棄されること。これは客観的経済的政治的基礎をもつてゐること。主觀的には中・朝・ベ・アジア三国党の前進を条件として、能動化していくこと。これ等のことを抜きにして、「党的問題」を軽視し、スターリン主義を無視しているからこんな把握がされるのだ」ということは全くあてはまらないこと。その他は、三節で展開、繰り返さない。

一向過渡期世界論の防衛と発展のために(1)序論 正誤表

35	30	30	28	27	27	27	26	26	26	23	23	22	20	20	17	17	17	16	16	15	15	15	14	14	14	13	13	13	13
上	下	上	下	上	下	上	下	下	下	上	下	上	下	上	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
14	3	2	2	11	5	3	20	18	18	8	5	5	13	11	17	3	6	4	5	1	17	17	17	3	20	19	6	18	

正しくも、
完成に
名文
のだろうか。
明です。
所得の
資本主義的私
「反スタ修正
政治的中黒」
想的
小ブル做慢主
もとと空論的
金融力頭制
超巨人金融
社会帝国主義
我々の立脚点
愚かにもつか
『赤軍版④』
労働商品所有
生命力をもつ
非資本主義ウ
自動崩壊する
ウクランド
統一されてい
とするのは
対島忠行
連続革命
七一年
小ル革命

「有利主義経済学の」を入れる理由化についてないからこのくると、論

正しくも指摘している如く
完全に
名分の
所有の
資本主義的私有制
「反スタ修正主義経済学」
おくべきです。
政治的・思想的
小ブル傲慢主義
もつとも空論的
金融寡頭制
超巨大金融
社会帝国主義化
我々の立脚すべき地点
愚にもつかない
『赤軍版4』
労働力商品所有
生命力をもつ→だから
非資本主義
自動崩壊する→この
ウクラウド
統一されている」と、
対馬忠行
とするのは諂論
継続革命
小ブル革命
七〇年

5	6	55	54	54	53	52	50	50	49	49	48	47	47	46	46	45	45	45	45	43	43	43	42	42	41	40	40	39	36	35
上	上	下	上	上	上	下	上	下	下	上	下	下	上	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	下	下	上	下		
15	2	16	5	8	16	2	5	12	7	18	9	1	10	20	21	19	13	2	23	11	21	3	6	18	16	16	15	14		

到錯	逃亡的否定
コスセボリタニズム	堂々として
謀サークル	
練統M作戦	
綱預論争	
武闘を	
活字活用	
「法則主義を	
ウクランド	
徹回	
労働力適品	
楊棄して	
コスセボリタニズム	
綱預	
蓄積構造	
末露	
内的衝撃力	
見失をわれて	
被差別排部落大衆	
する。といつた	
要求する。組	
整備運動	
しないかった	
小ブル	
気づさかれ	

逃亡的に否定	當々として	であった)〃を
倒錯	コスモボリタニズム	
連統M作戦	綱領論争	
「武闘を	「法則主義」を	
活学活用	ウクラウド	
揚棄して	労働力商品	
コスマボリタニズム	綱領	
蓄積構造	末路	
内的衝撃力	異常	
見失われて	被差別部落大衆	
しなかつた	する、といった	
要求する、組	整風運動	
小ブル革	気づかされ	

3

塙見方也論叢★1

定価二五〇円

同盟の革命的再建のために（その一）

ある同志への手紙一

ある同志への手紙II

同志激励を批判す

塙見方也論叢★2

定価二五〇円

同盟の革命的再建のために（その2）

連合赤軍敗北の正しい結語の下、プロレタリア

革命主義の旗を高く掲げてさらに前進しよう！

塙見方也論叢★3

定価三〇〇円

トロツキズム・毛沢東教条主義を止揚し、

プロレタリア革命綱領を獲得するために

塙見方也論叢★4

定価四八〇円

連赤の責任回避と小ブル民族主義・生産力主義を

批判し、マルクス・レーニン主義の正しい継承と

発展の実践的獲得のために

塙見方也論叢★5

定価二五〇円

共産同（RG）批判への基本視点・メモ

革新（社）派の坂口君を批判す

ブルジョア・マスコミの無能挾かづ

小ブル自由主義的使用に反対！——坂東国男

塙見方也論叢★7

五月刊行／予価三五〇円

一向過渡期世界論の訪衛と發展のために（2）歴史

ゲバラ・カストロ指揮とわれわれ

現代過渡期世界と世界革命の展望

4・14 バレスチナ革命連絡集会へのアピール 他

定価450円(税70)

連絡先=東京都葛飾区新小岩1の9の7 あけみ荘2号室 塙見方「論叢」係

郵便番号137-0011 発行者・塙見方由 (明治書店・新日本出版販売)